

FIGHTER?
FIGHTER!

16
Restart



Miracles! Episode 16 (Restart)

- Fighter? Sister! -

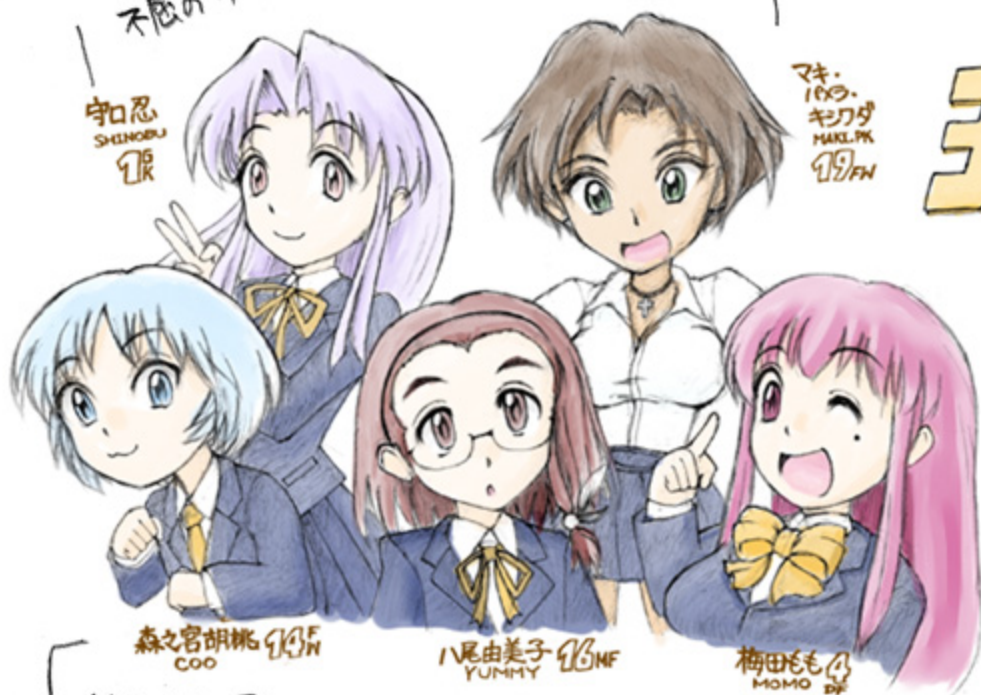
時にカッパル時に武人、
麗い見た目に騙されては
いけない。
不屈の守護神。

守忍
SHINOBU
GR

日系4世ブラジリアン。
誰にも止められないダシリサバ嬢。
トリッキーウイング。

マキ
163
キリダ
MAKI PK
119/FW

3RD



森之宮胡桃 GR/FW
COO

八尾由美子 GR/MF
YUMMY

梅田もも GR
MOMO DP

クールで粘えどこのない、
でも時に何も考えない
ネコ娘。
高次元戦闘爆撃
センターFW。

ヒロイン
本日の主演

努力家の頼れる姉貴。
ガッツと肝っ玉は
天下一品！
MF/DF守護職人。

B3桁のダイヤモンドで
バキンを荒い回る食神。
フェアリー・DFリーダー。

● 男性陣

- うえまち だいり
・ 上町大地 (2年) ... サッカー戦術と乙女心掌握の天才。2-4 (監督)。
- からぼり さとる
・ 空堀三十八 (2年) ... 軽い足腰と無駄に豊富なアイデア、
4-6、プロデューサー。

登場人物
ご紹介

日露ハーフの元フィギュア
スケーター。物腰柔らか。
微笑みと絶やさぬ。
中盤の働き蜂。
ハニービー

ボーイッシュ&元気一番。
ムードメーカー。
FW兼任の超反応GK。

1ST

平野
エレナ
ELENA
8F

吹田千里
CHEETAH
GK



佐古都
COTTON
12F

天王寺ありす
ALICE
21F

此花可憐
KALLEN
9FW

西条明日葉
LEAF
15F

天下無敵のボク倒せあせつさま。
敵も味方も大混乱。
鉄壁の右サイドバック。

見た目派手でも
線の下のカ持ち。
気配り大好き
マネージャー。

一見ミューガバズ。
実は底の知れない
モオ少女。
ファンタジスタ。

ド単純だけどどこか
カワイイ罠人坊。
ユース代表の逸材。
エース・ストライカー。

神経質そうだけど
オシャレでカワイイ委員長。
クレバーなスピードDF。

天真爛漫食いしん坊な
ナチュル・ガール。
超攻撃的パワフルベロ。

無口ながら
存在感ありの
超絶美少女。
実はお茶目。
フィジカル系
19FW。

2ND

美原はな
HANA
25F

天満蘭
RUN
3F

堺愛
LOVE
11FW



和泉流
RENMU
5F

長居美緒
MIO
10FW

難波鳴海
NANA
7FW

センス抜群
切れ味抜群
おんだかんだいいとこむく
ズいい奴。先達サイドアタッカー。

強く優しく頼もすぎる。
我らが黒柱。
パーフェクトボランチ、キャプテン。

空道キャー小娘
お宝はん
美浪花主婦。
盛り上げ上手な
イケカル司令塔。

●あらすじ？

「ミラクルズ」はとある街の女子サッカークラブチーム。
ただいまは冬の日本一を決めるオープン大会
「クイーンズカップ」めざし、にぎやかに奮闘中。
今回はどうやら頼れるみんなのお姉ちゃん、
ユミ姉さんのお話らしいですぞ？
はてさて、どんな騒動が巻き起こりますことやら……

●もくじ！

- 受験を控えた３年生
- ヘタクソ
- 悩み
- 思い出
- 誘い出す
- 眼
- ガードグラス
- 年下の男の子
- 変わりゆく変わらない日々
- 負けるには
- 戦え姉貴
- 宝物

■ 受験を控えた3年生

——キーン・コーン・カーン・コーン……

「……ユミ・ねえ・さんっ！」

「ぎゃっ」

終業のチャイムと同時に背中をどやしつけられた。この体重の乗ったどやしつけは……

振り返ると、横に大幅な小関さん。みんなから「オーゼキ」と尊称される、クラス一の関取だ。

「ねねねね、日本史のノート借りられない？ 洗って返すから！」

「ノートは体操着じゃないわ」

「ん！ もお、軽いレディース・ジョークじゃない！ ユミ姉さんも心の横幅を持たないと、オ・ト・コ・ノ・コにモテないぞ？」

「……はい、これ」

「ごつつあんです！」

手刀を左右に振ってノートを受け取る小関山。あの仕草が「心」という字を描いてるってご存知ですか。そう相撲道は心の道、ユミ姉さん、こと八尾由美子、苦笑いしつつ、

「……けどオーゼキまで『ユミ姉さん』って言うのやめてよ。同い年じゃない」

「だってミラクルズみんながそう呼んでね、ああそーいやユミちゃん『姉さん』っていうのピッタリ！って思ってる」

「それは後輩が多いからじゃない。ももとか『ユミ』って呼ぶよ？」

「そんな魔法少女みたいなのは呼び方貴女にはまるで似合わないわ！ どちらかというと毎回微妙にセコイ罫を仕掛ける悪の女幹部。なんで世界征服狙ってるのに幼稚園とか狙うんだろうね、水爆とかマスタードガスとかパーツと使えばいいのに！」

「その後の経営を考えると人的リソースをできるだけ温存するのは帝国主義政策の鉄則よ。悪かったわねセコイ女幹部で」

「幹部なんだからいいじゃない！ 私なんかきつと、ヒロインの女の子のよく行く定食屋のおばちゃんよ？」

「それどっちがいいのかわからないわ」

「はい、大盛り。たくさん食べて、ユミ姉さんを倒してね！」

うん！ わたし頑張る！ 狙うは大金星！」

「横綱扱いありがとう」

「♪どす恋どす恋ドンスコイ、魔法の張り手で立合い・カチ上げ〜！」

「ちよつまっ抜ける！ 底！ 揺れ！」

まあ年頃の女の子はみんな魔法少女です。その揺れで気づいたかクラスメーツが寄ってくる。

「……おつ、オーゼキい、それユミ姉さんのノート？ 俺の分もコピーしてくれよ！」

「ちゃんこ！」

「あつ、なに、お姉ちゃんのノートのコピー!? あたしも混ぜて混

「ぜて」

「オレもオレも！ 姉貴のノート字キレーだから読み易いんだよな！」

「なにに、お姉様の参考書配布会なの？」

みんな。

同じ年、だつてば。

「えーちよつと待つてえ、結局何部になるのお？ 一〇とかで足りるう？」

「もう三〇ぐらい刷つちまえよ。オレ売りまくつて金回収してくつから」

「ダメよ森本っち、お客から絶対ボルでしょ！」

「そりやエージェンツなんだから、手数料取つてトーゼンだろ」

「でも肝心のお姉ちゃんがタダで貸してるんだよー？」

「ああ、じゃ姉貴にもペイバックするさ」

「そんな商売みたいにしたら怒られるのお姉様じゃん」

「ユミ姉、これ習字かなにかやつてるの？ いつ見ても達筆だよね」

「え、ええまあ、ちよつと子供の頃わりと長く。今は開店休業だ」

まあでも、敬意と愛情の表現と言えなくもない。

大人っぽい、つてことかな。ふふふ。

「ネエちゃんらしい、ババア趣味だぜ」

「宮市にだけは絶対ノート回しちゃダメ」

「ウソウソ、ジョーダン、ジョーダンだつてばあん！ おネエ様あん！」

「あんたみたいな弟持った覚えない」

「いやあんゆるしてえん。代わりに世界史のノートどつかから入手してくるからあん」

「前そんなこと言つて持つて来てくれたの、私のだつたじゃない。回り回つて」

「「さつすがユミ姉さん!!」」

言つてから照れた。

これじゃまるで自慢じゃない。

「ネエちゃんさー、やつぱこれ商売にしようぜ。俺も客まとめてくつからさ、三割。三割でいい。ねーネーちゃん」

「懐かれても駄目なものは駄目」

「これだつて全教科セットにすりや千円だつてみんな出すつて。客を百集めりや一〇万だ！」

「宮ぽん、集客は歩合な！」

「女子はアタシが」

「もう貸さないわよ!？」

「「へえい……」」

一応テストに取り組もうという姿勢はあるのに、なぜ変に楽をしようとするのか。そもそもノートは取る時に記憶の定着を助けるものだから、借り物のノートでは勉強効率が悪くなるのは当然で……ぶつぶつ……

「じゃ私行ってくる」

「おう頼むわ、壊すなよコピー機！」

「オーゼキが乗ったら間違いなく壊れるなあ」

「いくら小関でも乗ったりはしないわよ」

「お姉ちゃん知らないの？ オーゼキちゃんなんでも土俵入りしたがるのよ。彼女の座右の銘は『恋はいつでも初土俵』」

「いまひとつ意味が分からないわ」

「しかしオーゼキの肩持つわけじゃねーけど、新しいコピー機を見ると尻拓を取りたくなる気持ちはわかるなあ」

「わかんないわよ」

「わからないわよねえ。」

「まず顔拓じゃない？」

「えー？ まずケツだろー？」

「女は顔が命よ」

「男だつてケツが命だよ。ケツ断力つて言うだろ」

「ふっ」

アドリブで繰り出したにしてはよく出来た駄洒落だ。さすが受験生。ていうかね？

「……だいたいみんなもう受験よ？ いいの、中間試験程度でこんなことやってて」

「お姉ちゃんみたいに東大受けようとは思ってないもーん」

「まあ受験まであと半年もある。永遠にも等しいさ」

「だよな。明日。そんな未来のことはわからない。カサブタンカ」

「もー……あー、私もう部活行くから小関にノート明日でいいって伝えといてくれる？」

「ういういー」

「姉さんスゴイよな、勉強もできるしサッカーもできる。こういうのを確か文武……ブンブ……えー……ブンブンブン、蜂が」

「吉田君、志望早稲田とか言つてなかった？」

「うん。オレ早稲田の応援歌歌えるよ。」

♪馬っ場のー次は 早・稲・田！

♪馬っ場のー次は 早・稲・田！

かーぐらぎか いーだばし くだんしった たけばし おおてま
ち！」

「それ東西線覚え歌よ。応援歌じゃない。」

いや、応援歌覚えても入れるわけじゃないから」

「えっ、そうなの？ こう、意気込みと情熱を見せたらだいたい取ってもらえるんじゃないの？」

「見せるチャンスがあればね」

「姉さん心配しすぎだよ。老けるぞ」

「うるさい」

「姉ちゃん姉ちゃん、オレの慶応はどう？」

「どう、つていきなり言われても……本田君の名前テストの張り出しで見たことないんだけど、能ある鷹だからお爪をお隠しになつてるのかしら」

「まかせろ、補習の張り出しには常に載る」

「じゃあ厳しいかな。相当頑張らないと」

「あれっ？ 慶応って、塾なんだろう？」

「いや。えー、いや？」

「先生が一人つて聞いたぜ？ そんなちっちゃい塾、月謝払えば誰でもいけるよね？」

「聞きかじった断片知識が都合のいい妄想を生んでるわ。」

ちなみに早稲田も慶応も最難関よ？ みんな、模試とか受けてないの？」

「モシ？ それは野菜炒めのメインディッシュですか？」

「♪モシ・モシ・ケイムよケイムシャンよ チュクワとキャマビヨコ チョダイイー・ナ！」

「カオスな歌唄つても状況は変わらないわよ」

「相変わらず姉さん厳しいなー。さすが東大入ってキャリアをいい席次で取って厚労省あたりでバリバリ出世して『女性初の事務次官か』と期待されてたのに闇の力で冤罪に巻き込まれそうなのだけのことはあるわ」

「ひょつとしてみんな私をからかって遊んでる？」

なんてことを言ってますと。

「……おい、誰か定規とカッター持っていないかあ？ オーゼキのバカがA3に刷りやがってー！」

「ちよつ、違うわよ！ A4二枚分をA3一枚にまとめて刷ったら、真ん中で切るだけで二枚になるのよ！」

「それA4二枚に刷らない理由はどこにあんだよ」

「バカね、コピーの料金は枚数で決まるの！」

「学校のコピー使わせてもらうのに金はカンケーねーだろ」

「……私はA3が好きなのよ!! いっだってボクたちはあの青い空を見上げて大は小を兼ねるの！」

「オーゼキ落ち着いて」

「……あれ、なんだこれ、なんだ字おつきいぞ？ ってかおい！ ちゃんと刷れてなくてはみ出てるじゃねーか。なんで拡大してんだよ！」

「だってA4↓A3は拡大って書いてあったんだもん」

「そりゃ一枚を一枚にコピーする時だよ！」

「もーまったくしょーがねー、オレが行ってくる！」

「宮市頼む」

「宮市だけじゃ不安だ、森本、ついてけよ」

「あつ、いや、オレなんかがついてくより、先生に操作教わったほうがいいんじゃないかな！ これコピーしたいんですけど、って！」

「「それだ！」」

「だめよ」

大丈夫かこのクラス。

「なんでみんな私の努力を認めてくれないのかなー。いじめ？ ひょつとしてこれいじめなの？」

「小関、大丈夫。きつといい人、見つかる」

「2年の上町君とかどうかな！ ね、ユミ姉さん！」

「……」

その人がそんな簡単に手に入るなら私が先に手にしてるわよ？

……とかなんとか言っちゃったりして、まったくもう。

「あれ、黙っちゃった。ひょつとしてユミ姉も狙ってるの？ うひひ、優等生も隅に置きませぬのう、のう、のう」

「まあ、ね、あんな上物が手に入りや生まれてきた甲斐があったってもんよね」

「でしよう!？」

似合ってると思わないあたしと上町君！」

まあ確かに私旅好きなんだけど。自分の足で歩く方が、いいかな。

「……まあね。目がくりくりつとするとことかね」

「よおい！ 字ちつちやくて見にくくてしょーがねーだろ!?」

「おま何言つてんだこれでもカンニングにはでつかすぎるっつの

「オレはこれ見て勉強するんだ！ カンニングは各個人にまかせろバカ！ ちょっともー貸せ！ 俺がやってくる！」

「えっ？ カンニング用でしょ姉貴ノートのコピーなんて!？」

「大丈夫よ森本、コピー機には拡大つて機能があつて、拡大コピー取ればいいの！」

「今縮小してきたんだよ！ オーゼキはなんでそんな拡大が好きなんだよ。まず自分の横幅を縮小しろよ」

「まっ。それってパワハラ!？」

「二段腹」

「あなたたち乙女をなんだと思つてゐるの!? 私はオーゼキであつて、相撲戦士じゃないのよ!? あなたたちどうせ陰で『ツツパリが得意そう』とか陰口叩いてるんでしょ! はいはいはい、どうせあなた

「は、千代の富士よ！」

顔はいい、
つてアピールかな……あと実力も人気も一級品……

「康と膝に悪そうなことを！」

「だっておまえ、休み時間よく四股踏んでるじゃないか……」

「踏んでるわよそれがなにか!？」
いい？
四股を踏むと股関節の柔

軟性が養われるのよ？ ふともももシェイプされて、ヒップもアップ

するの！」

「そういう効能は実現してから吼えてくれ！」

「なに、私はもうシェイプアップする余地もないほど美しい、つて？
ふふ、宮市、私にはもう上町君居るから」

「なに絶望的な勘違いしてんだ、お前と付き合うぐらいならバランス
ボールと付き合うつての！」

「照・れ・る・な」

「ムツカツツクーツ！ 第一上町コーチ君みたいな超男前がお前み
たいな人間砲丸眼中に無いつての！ ありすちゃんみたいな美少女か
らネエちゃんみたいな美熟女までよりどりミドリ深緑なんだから
な！」

「みんな宮市にだけは絶対見せちゃダメよノート」

「えっ？」

熟女つて褒め言葉だよな!? 熟れた女、つて書くんだぜ？ 熟れ

熟れ・ムレムレ・むんむん・お色気。

ああ、色気はあんまねえな、ネエちゃんな！」

「わぎとでしょ。いえ、わぎとだと言つて。その方が罪が軽い」

「えーつ、何言つてるかわけかんねえよう！ ネエちゃんちよつと賢
いからつて馬鹿にしないでくれよう！」

「だからあ、宮市はあ、ユミちゃんは諦めてえ、私と恋人に、な・
る・の☆」

「はあ!？」

「ふふ、そんなにツツパらないで。ツツパリは、私の武器よ？」

「さつきあんなに嫌がったのに」

「……できた！ 姉貴ほら見て、鶴に折ったから、カンニングペーパ
ーだなんて誰も思わないよ！」

「そうね。じゃ森本君はせつかくだから千羽鶴めぎして千ページ、頑

張ってみようか」

「姉貴……将来は教師になるのかい？ 人をノセるのが巧すぎるぜ……
ハハ、そんなの作っちゃまった俺もう、卒業までカンニングし放題
だぜ……参ったな……学年トップ、姉貴から奪っていい？」

「ええ」

もし千羽鶴カンニングペーパーで奪われるなら、その技巧と努力に
賞賛の声は惜しまない。

「……ハイホー！ コピーあがりー！」

「おー待ってた待ってた……つてだからA3にしないでいいんだよ！
しかも一ページで一枚かよ字デカすぎんだろ！」

「やー姉さんそろそろ小さい字見難いかなあと思つて……」

「それ・私の・ノート・です」

「姉ちゃんつてばきつとその老眼鏡外したら美人なんだぜ？」

「そんな見え見えのサビキに掛かる安い女じゃないわよ」

「だから姉ちゃん可愛げが無いんだよ、ここは『いま美人じゃないと
でも?』と言つてから思わず隙を見せたことに気づいてほんのり頬染
めるところだ」

「その悪巧みを勉強に活かせばいいのに」

「フツ……俺が本気を出したら……たいへんなことになるぜ……」

「じゃ出さないでいいわ」

「みんなそう言うんだ」

「……残り999……残り999……残り999……」

あれ？ 足が生えた」

「うおおスゲエ、進化論だ！ ダーウィンが来た！」

「鶴人だ！ 鶴人だ！」

「森本にこんな才能があつたなんて！」

「あつ、姉貴！ こつ、これ、これ折り紙推薦でどっかいい大学行けるかな!?」

「どこ行きたいの」

「京都大学！」

「ん……………もう少し、がんばろう」

「えつ、待てよこれで京大も難しいってんなら、いったい東大ってどんな大学なんだ!?」

「きつと鶴折つたらあとで恩返しに来てくれるような大学なんだよ！」

「ゲェー！ そんな大学狙ってるなんて……」

「「きつすがユミ姉さん!!」」

……………さ、練習行くか。

ヘタクソ

「んっふふっふふっ」

「おや、ご機嫌だね、こつとん」

「ご機嫌ですよ」

「どうして？」

「だってミラクルズは、毎日毎日、どんどん強くなっていくんですもの！」

「ああ……」

ニッコリ笑う住吉古都、チームマネージャーに、釣られて上町大地、コーチも思わず微笑んだ。

——こちらは女子サッカークラブチーム「ミラクルズ」。

今は学校のグラウンドを間借りして、冬、年度のオープン全国大会「クイーンズカップ」目指して猛練習中である。

上町コーチの飽きさせない丁寧なメニュー構成もあるし、チーム仲がいいこともあって、笑顔は絶えない。が、やってることはかなり高度だ。速いパスが少ないタッチで、小気味よく走る選手の間をポンポン飛び交う。観てるだけでも楽しく、実際、好ルックスぞろいの選手達を眺めるのも兼で、放課後の生徒達がそこかしこでのんびり見ている。

しかし、そこはさすがに幾多の修羅場をくぐってきた上町大地。さすがに顔を厳しくして、

「いや、こつとん、どんな時でも、満足なんかしちゃ駄目だ」

「はい？」

「『これで十分』なんて思ったら、そこで進化は止まる。まだ先がないか、もつと良くなれないか、それを毎日考えなくちゃね」

「はあい」

首をすくめる古都。

こーちは……普段はぼけーつとしてるのに、いざピッチをチームを見つめると、突然「本物」になる。毎度見慣れてるはずなのに、この切り替えが来るたびに、ドキドキしちゃう。

これはいつでも側に居られる、マネージャーの特権でしょう！

そーつと横顔を覗けば、歳はたった一つ上、コーチになってわずか半年だというのに、もう絶対の信頼が置けるリーダーだ。鋭い眼差し、引き締まった口元、スラリと伸びた背筋。つまりオトナのオトコのヒト……ステキ。

「……地方予選だってわからないよ、女子は代表の活躍で年々注目が高まってどんどん強くなってきてるから、去年みたいに簡単に突破できるとは限らない」

「……」

「まして本戦へ上がったら上がったで、今度はいつアマテラスやヴァルキリーズや……聖愛学園みたいな強豪とぶち当たるかもしれない。一回戦で当たって負けて、去年と同じでしたエへへ、というのは寂しいしね。やるからには少しでも上へ行きたいよね」

「……」

「……いやいや、そんな先のことを言ってる場合じゃないな。ともかく、まずは予選一試合を勝つ。それに向けて、練習試合一つ一つで力をつけていかないと!」

「……」

「……ん? こつとん?」

「……は、はい!」

「どしたの? ボーッとして」

見惚れてました、

「すいません! 大丈夫です!

はい、そうですね、確かに一試合一試合が勝負です!」

「そうそう、その通り」

ニツコリ笑う。

このニツコリがまたカッコカワイクで、これが。

たまらないなあもう。

わたしもね、たまーに選手みんな羨ましいなー、って思わないわけじゃないですよ?

コーチね、スキップがお上手なの。ナチュラルなの。「もうなにそれ!」とか思わず憤っちゃうぐらい。

例えば。

猫的な胡桃さんなら頭ナデナデ。それもね、まるで本物のネコにそうするように、耳の後ろのあたりをこう、カキカキってやったげるの。

これでもう胡桃さん陥落。

あのクールガールがふにゃりって顔して口元猫口。

ふくよかなエレちゃんならおしりタツチ。普通さ、いくらコーチと選手つても、そんな駄目じゃない? 2年生男子と1年生女子でもあるわけだし。

でも違うの。なんかうまいの。「ばーん!」って勢い良くでも1ミリも痛くなさそうな感じで、優しく叩くと、誰がどう見ても激励にしか見えないのね?

でももちろんエレちゃん一丁茹で上がり。

彼女ハーフで特別色白だから、顔ピンク色にして元々垂れ気味の目尻がもうパンドミたいに落ちてる。

エへへ、エへへってその日中変な笑い浮かべてるもん。

もうね。一事が万事そうですよ。

つまり簡単に言うると、超天然超たらし。

おかげさまでチーム内には「都合のいい勘違い」と「わたしの妄想」が鳴門のごとく渦を巻き……

まあでも、どんな形でも、モチベーションには変りなくて。その点、コーチはやっぱり、すごい。

「……でもでも、チームは本当に強くなりました。このまま成長すれば、無敵ですよ!」

「ははは。いやあ……まあ、コーチとしては、つつい、もつともつと、もつと、って思っちゃうね」

「じゃ、コーチが思われる、強化したいポイント、ってどこですか?」

「んー……全部」

「あははははは。それはまあそうでしょうけど。あえて言えば。強いて言えば」

「うーん……」

キュッ、と眉が険しくなった。

「……守備的MF、かな」

「……は？」

古都、思わず聞き返す。

「えっ、だって宇宙最強のディフェンシブハーフ（守備的MF）、長居美緒大キャプテンがおらつしやられていられまするでございますですよ？」

「ははっ、もちろんキャプテンはいい選手さ。」

だからこそ困るんだ、怪我、カード、実戦でキャプテンを欠いたとき……とても、困る」

「ああ……」

コンティンジェンシー・プランというヤツだ。監督、指揮官、リーダーという人種は、樂觀主義者と悲觀主義者がひとりの中に同居している。日本一のカップを掲げる姿をイメージしつつ、明日の試合を0―5で惨敗する覚悟も決める。つまり、ありとあらゆる可能性を考えている。

サッカーの試合では、怪我がよくある。それでもうその選手はその試合、あるいはそれ以降、使えない。また、累積警告で退場や次戦出場停止もある。観る者にとってはそれも「サッカーのおもしろさ」の一部分だが、やってる方にとっては死活問題だ。

大黒柱を欠いた時、ミラクルズは一体どうなるのか……キャプテンの居ないミラクルズなど、揚げの無いきつねうどんだ。それは、マズイ。

「エレちゃんにキャプテンの代わりはまだまだ無理そうですね……あ、ナナさんを下げる！」

「すると今度は攻撃の指揮が取れなくなる。可憐走らせて縦一本、みたいなオフエンスしかできなくなるので……それは緊急事態用だね」「ふーむ……」

ナナ、難波鳴海はユース代表に名を連ねるもう一本の大黒柱であり、もちろん何でもできるが、基本的に攻撃の選手であり、守備的な仕事をさせるのはもったいない。

「……あつ、そうだ、ユミ姉さんが、いるじゃないですかー！」

古都は1年生なので、去年の話は伝聞でしか知らない。しかし、ユミ姉さんは去年、いわゆる「中盤底」のポジションで暴れ回っていたと聞く。攻撃型チームへのモデルチェンジと、美緒のポジション変更によつてスタメンは失ったが、実際いまもよく守備固めで途中投入され、確実にその任をこなしている。人に強く労を厭わず豊富な運動量で走り回るその姿は、まるで猟犬のように頼もしい。もちろんチームメイトの信頼も厚い。

「……うーん……そのユミ姉さんが、ちよつと、ね」

「は、はあ。そうなんです？ ……どのへんが、どう、とか……」

「んー……口で説明するの難しいけど……微妙に存在感がないというか……キレがないというか……」

そうなのか。

古都は目を凝らした。紅白戦が始まっている。

ミラクルズの紅白戦は、八対八でオフエンス・チームとディフェンス・チームでやりあうことが多い。ユミ姉さんは守備チームのDF前、つまり定位置の中盤底に陣取って、オフエンス・チームの波状攻撃の防波堤となっている。

うーん、十分存在感あるけどなー……
それこそスタメンでも全然問題無いぐらい……

こうなると古都には、選手経験の無さが悔しい。この半年、一生懸命ビデオや動画を見るようにしているが、まだまだ見る目が養われていない。たぶんコーチには、私に見えてない何かが見えているのだろう。

『……まだまだだなあ……わたし……』

……ぽんぽん。

ビクッ、と肩が跳ねた。肩に手が乗る。

コーチが、頬を寄せる。

えっ？ えっ？ ええっ!?

そして耳元で、ウイスパー。不必要に甘い声で、ウイスパー。

「……よく観てて。ボール取るとこまではいいんだ。問題は、取ってから」

「ひゃっ、ひゃいい!!」

気になって観れましえん!!

この人ホントダメだ。どこかおかしい。

肩の掌の暖かさと近くの吐息と体温にどぎまぎしながらしかし頑張って古都はピッチに目を……目を……

むり……

あつ、でも。

攻撃側、ありますがボールを持って無謀にも真正面からドリブル突破を仕掛けた。ありすは課題として常に「突破」を求められており、そのこと自体は問題ではない。

当然、ユミ姉が守備に入る。ありすフェイント、しかし、しっかりボールを見てたユミ姉にはその一瞬こそがチャンスだった。

パンッ!

ボール奪取。お見事。

そして……

顔を上げてルックアップする。マキが右サイドタッチ際を上がる。

愛が正面、敵DFラインの裏を取る。左サイドからキヤーッと長槍・

流乃が駆け上がる。

絶好のカウンター・チャンス。

どーん……

ユミ姉が大きく蹴り出したボールは……

右タッチ、マキの頭上はるか上を、通り過ぎた。

もちろんそのまま、相手スローイン。

「……ヘタクソッ!!」

場が一瞬、凍った。

絶好のチャンスを潰された残念からか、マキがユミに投げかけた、素直すぎる言葉だった。

時間に余裕がある、手前に転がしてくればアタシがなんとかした、てか、できもしないことをムリにすんな、誰かにまかせろ、後ろのモモとかに！

「……」

ぐったり、と膝に両手をついてうつむくユミ姉。肩を震わせ、唇を噛み締め、でも顔を上げて、片手を挙げた。謝られてはそれ以上は言えない。マキはプイ、と背を向けた。

「……ストロップストップ、……マキ、」

キャプテンが笑顔で両腕を頭上で大きく振って、それからマキを見て人差し指を振った。マキはしぶい顔をして、かるーく顎を引いた。頭を下げたつもりらしい。美緒、苦笑いして向き直る。

「……姉さん、そんなに慌てなくても」

「……ん。……慌てては、ないんだけど」

「ユーミー、わたしへ投げてくれていいようーう」

「ん、ありす居たから……ごめん」

——三言四言、言葉を交し合って、ゲームは再開された。

「……ね？」

「な、なるほど」

離れていく顔と手に軽く惜しみながら、古都はうなずいた。

「……キャプテンばりの大きなパスを狙ったんでしょか」

「だろうね。もちろん頭のいいユミ姉さんのことだから、それが確率の低いプレーだってこともよくわかってるんだろうけど……」

「ですよ、キャプテンと同じことは、なかなか」

美緒の、ボールを奪うや即・配給する中長距離パスは、ナナをして「日本一！」と太鼓判を押させしめるほど絶品で、チームの必殺の武器の一つである。そんなもの、思いつきでばいばいと実行出来るものではない。

「……ま、一般的に、成長前には踊り場があるものさ。進化つてのはステップ状になってね。ステップを上げる前には、もがく時期がある。そんな時期でも、成長したいと願い、また努力し挑戦する。これがだいじ」

「……そうですね」

そう言われれば……無理なプレーを志向してるからか、動きがどことなくぎこちない。自信なさげだ。丁寧に行こうとか、わずかでも時間を稼ごうとか、細かい余計な意図が見えて、弾けるような躍動感、これが無い。

守備の得意なMFと言えば、まずなにより味方を鼓舞するような、敵にボールにかぶりついて行く、ガッツ溢れるプレーだろう。特にユミ姉さんといえ、それじゃないか。そういえば最近、そういうのを

あまり見ない気がする。

「……ユミ姉さんは、ホントに大切な選手なんだ」

大地は目を紅白戦から離さず、呟く。

「守備的MFだけじゃなくて、中盤から後ろどこでもできるし、右も左も苦にしない。誰の代わりでもできるし、どんな役割でもできる。

途中で守備を立て直したい時、物凄く頼りになる選手なんだ。いわば……『替えの効かない、替えの選手』さ」

「うまいですね」

古都の褒め言葉は受け流して、じつと選手たちを見つめる大地。ちよつとつついてみる。

「……ではコーチ、個人授業なんかどうです？ ウヒヒ」

「うーん……そうだねえ……」

「手取り足取り？ いやあん、羨ましいーん★」

「ん？ あ、じゃあ、こつとんもやる？」

「は、はい!？」

「あ、えー……あの、なにを、です？」

「ボール奪取の基礎、あたりからかなあ」

「は……いや……えー……」

「いえ、あの、羨ましくくないです」

「はあ。」

「変なこつとん」

変なのはコーチです。

まあね、ここで軽やかにセクシーな切り返しが出てきちゃうような人だったら、みんなついて行きにくいのも事実なんですけど。

憎たらしいほど自然体、っていうか、自然体なのが憎たらしい、っていうか。

っていうか。

……では今回も、お手並み拝見といきます、コーチ。

「……ユーミ、さつきはゴメ」

「ん？ あ、いいよ。別に。……ヘタクソは、事実だしね」

「マタ……」

「あ。はは、ほんとほんと。皮肉じゃなくて。マキ、気にしないで」

「ウウ……」

ロッカールームで、マキが謝りに来た。ユミは着替えの手を止めて笑う。

「……あれはまず私が謝らなきゃね。無駄走りさせて、ごめん」

「ア！ ウウン、そんなのは、いーんだけど、サ」

「あうーん、なにやってるのう、ふたりともおー！」

「わ」

半裸のものが、マキユミ二人まとめて抱きしめる。

暑苦しい。

「ちよつ、ちよつちよつちよつ止めてもー！」

「グ、グルジイ」

もちんのお胸は一〇〇という力強い数字を超えており、本気で抱き締めるとまさに圧迫爆弾（プレッシャー・ボム）。そして梅田もという女はつねに本気だ。

しかも今は下着だけだし。運動後だし。なんかもー肌と肌がぺちゃつ・めちゃつとこう……息苦しい。

「みんななかよく、ね！」

「仲いい、仲いいから！」

「ア、アズイ……アズズギル……」

きつと湿度がリオ・デ・ジャネイロと違うのだろう。マキが緑の目を白黒させている。

ようやく離してくれた。

「じゃあ、仲直りの印に、えすぼわー！ー！ー！」

「ア、それはサンセイ！」

「あ、ちよつとごめん、今日は用があつて」

「エー！、ユーミつまんなーい！ 最近付き合い悪いぞー！」

「そお!? いつもみんなと居ない？」

「いま付き合ってくれないと、悪いのです！」

「いや……まあ……」

「ごめん」

「ぷー。……まあ、ユーミは東大目指すだろうから、帰ってお勉強もしないといけないのかも、だけどー！」

「いや、そういうわけじゃ……まあ、まあ、いろいろ。ごめん」

「しよーがないなもー」

「じゃ私、ユーミの分も食べておくね！」

「あはは……じゃ、お願い」

「ウイムシュー！」

「マドモアゼルだつてば」

「シュー……あ、くーちゃん、今日はシュークリームじゃないもの食べなきゃダメだよ!? 栄養偏るからね!」

マキと顔を見合わせて、笑った。

結果的には、いつものように、ももが接着剤になってくれた。ボン・ド・ガールはいつだって、ダイナマイト・バディ。

——チームと別れて、通学路をひとり歩く。

彼女は煮詰まった時、気分を変えたい時、ひとりテクテク歩いた。場所はどこでもいい、できればあまり周囲に気を取られない、公園なんかがいいけど。

歩くのが好き。だから通学用の革靴も足に合わせたイージーオーダー品だし、普段の靴もトレッキングシューズにスニーカー。ヒールのある靴など一足も持つてない。

音楽も聴かずにテクテクしてると、思考がくるくる回りだす。

教室での騒ぎを持ち出すまでもなく、八尾由美子は勉強がかなりできた。が、典型的な秀才タイプ・コツコツ積み上げ型で、キレとか頭の回転という意味では、同じ優等生でも、はなこや古都ほどではないと、自分でも認めている。

自分でそういうことを認められる人、自分の位置を客観的に把握できる人、こそが本当に「頭がいい」のだから……

だから迷ったら、思う存分、よく考える。時には歩きながら、ソクラテスのように。

『……ダメだ』

そう思った。

『……才能が、無さすぎる』

もちろん好きでサッカーをやってるぐらいだから、運動能力は人並み以上だ。絶対めげないガッツにも多少自信があるし、持久走・心肺能力は去年かなり鍛えた。たぶん、エンドレス・マラソン大会でもやれば、チームで一二を争えるだろう。

そんなものをやれば、だけど。

ただ……足元でボールを扱うとなると、ただけない。

元々があまり器用ではない上に、どうも身体の動き・筋肉の動きが生来固くて、「柔らかなボールタッチ」などという表現からは程遠い。当然、トラップもヘタだし、トラップが苦手ならばパスを出す時間的余裕が減り、余裕が減ればますます精度は下がる。

そう、さっきの大ホームランのように。

それでも一人しか居ない去年ならまだしも、今は同じポジションにキャプテンが居て、エレーナも居る。

キャプテンはまあ、もうどうしようもないとして、エレーナも元・フィギュアスケーターだけあって、なにより身体能力が素晴らしい。ジャンプ一番の高さは到底かなわず、もちろんスタミナも十分、一発のスピードもユミよりある。そしてミックスらしく体幹のゴツさ、特に縦方向の身体の厚みといったら小柄なユミの倍はあり、当たりの強さというMFに大切な要素でも完敗だ。つまりいわゆる「上位互換

品」で、勝てる要素を探せば……常に温和なエレに対して、闘志ぐら
いか。

『……といっても、それもキャプテンがカバーしちゃうし、ね……』

去年のシステムは、リベロを置いた1―3―3―3。ユミの担当は
中段の3の真ん中、いわばピッチ中央で狂ったようにボールを追
奪って、周囲の選手に渡す役。そこがスタミナと闘志と職務に忠実な
職人魂のあるユミにはぴったりの職場で、だからこそチームは地区予
選を突破して全国大会進出などという果実を手にしたのだが……そこ
にキャプテンがコンバートされて、ユミは職場を失った。

『……はあ。いくらなんでも今からキャプテンと同じレベルに達する
のは、無理。』

重くなる思考と共に歩みが遅くなり、いつしか手近なベンチに、あ
まりないことに、腰掛けた。

背もたれを使って、うーんと伸びをする。

『……やめよつか』

不意にそんな言葉も口をつく。

……が、すぐかぶりを振る。あの気のいい連中とわいわい付き合え
る。それだけでも、チームに居る価値はある。

その選択肢は、無い。

『……いや、選手。マネージャーに転職』

こつとんの顔が浮かんだ。一七人の集団に二人のマネージャーは要
らないだろう。しかも古都はすぐよくやってくれている。彼女は決
して出しゃばらず、必ず選手を立てる。ド派手な外見に似合わぬ黒子
っぷりで、ああいう子が、マネージャーに適任なのだろう。

私なら、もつとズケズケものを言ってしまうそう。
無理か。

『……それに受験、どうしよう……』

一応志望校は難関である。当然、しっかり受験勉強が必要で、お正
月までクイーンズカップを戦ってる暇は、本当はない。

『……いや、決勝まで行くつもり？』

センター試験は一月中旬にある。もしホントにそこまで行くなら、
それこそ移動中でも参考書を開かねばならないだろう。

決勝までの日取りを思い浮かべて、一人笑った。

『……皮算用すぎ』

でも……上町コーチが率いてくれば、それも、そんなに不可能な
夢ではない、ような気もする。

あの子……あの人……彼……は、そんな魔力のようなものを、持つ
ている。

なんだか、彼と一緒にいれば、なんでもできる、というような。

1年生たちを見るがいい。全員がキラキラした目で彼を見つめ、もうそれは師匠と弟子とか、アイドルとファンとか、そんなレベルを超え、まるで教祖と信者だ。さすがに自分はその目にはしてないと思うが、理路整然と今なすべきことの説明を受けてる時など、ひよつとするとそれに近い表情をしてるかもしれない。

『……推薦貰って決めちゃうとか……』

……や、なに考えてるの、私』

遊びでやつてるサッカーのために人生を左右するような進路を……遊びでやつてる？

最近はどうとも言えないかもしれない。授業とその予復習の時間を除けば、録った試合を観たりランニングで汗を流したり……ほとんど時間を、サッカーに、いや、ミラクルズに使っている。

とはいえ。

彼女の志望校に推薦が無いこともあるし、なんとなくそれも「ちがう」気がした。

『……うゝ……んゝ……』

何十回めかわからないループがぐるりと一周回って、いつもの結論に落ち着いた。

『……がんばろ』

ユミの好きな言葉だった。

とにかく、みんなの役に立てる、何かで役に立てる選手になるしか

ない。そのためにがんばるしか、ない。

受験の方は……まあ、やれるだけのことを、やろう。

やめる理由はいくつか思いつく。

が、やめたい理由は、思いつかない。

伸びてズレた眼鏡を、左手でキュツ、と直す。背筋を伸ばした。歩き出す。

テクテク、テクテク。

■ 思い出

「……ふあ、ふみへーはんはー!」

「あー ホントだ! ……ユミ姉さーん!!」

こちらは1年生御用達ドーナツショップ。顔寄せあつてドーナツ山とお茶と小話に盛り上がつてた六人は、ガラスの向こうに八尾先輩を見つけた。可憐が飛び出して、腕をとって引き入れる。

「つかれさまーッス!」

「……邪魔しちゃ悪くない?」

敬礼までする千里に、苦笑い。全然、という言葉と共にありすとエレナが真ん中を開けた。歩き疲れてもいたし、座る。あ、

「てんちよーう! 珈琲ひとつー!」

ホントはセルフの全国チェーン、だが店長はミラクルズサポー……いや男子たるものいくつになつても、カワイイ女子には弱い。千里の叫びにニッコリうなづく。

「もう、悪いわよ」

「だーいじようぶッスよ! おかわりみたいなもんッスから!」

千里は少々強引なほど人懐っこく、だが元気があつて憎めない。ユ

ミも別に叱るわけでもない。上級生の自分を招き入れてくれたのが、素直に嬉しい。

にこやかな店長に、二六二円をキッチリ渡した。千里が出すというが、もちろん断る。

「……なんのお話してたの?」

「そろそろ中間試験で! ここにいるこのバカレンが、『あたしもうどうにもなんない』と鳴き声あげるもんッスから!」

「あげてないよ! どうにもなんないけど! あんただってたいして変わんないじゃん!」

「フッフッフ……オレは赤点は取らん!」

「威張ることかあ!」

可憐はバ、いや、勉強が苦手で、毎回補習組。千里は要領ばかりは大変よくて、毎回ギリで回避する。エレナがいつものほんわり笑顔で聞いた。

「ユミ姉様、ユミ姉様の勉強法をぜひ教えてくだサイ」

学年上位が貼り出されると、八尾先輩は3年のいつもトップ付近に居る。なんだ、そういうことか、と微笑んで、

「ん? 私? んー……そうね、普段からコツコツ」

「それができてねーんッスよー」

「なー! そうだよ、なー! かしこの人みんなそーゆーんだけど、それができねーから、困つてんだよ、なー!」

「うんうん。なんかこー、直前一夜漬けでガツンと三〇点ぐらい上乘

せする方法を……」

「ふふ、無いことはないわよ」

「おっ!!」

「出題範囲、全部覚える」

「「だーっ……」」

「ふふ」

並んで背もたれに溶ける二人に、笑った。

「やっぱり最後は力づくですか？」

「そおねえ。出題範囲は決まってるわけだから、それで点が取れないのは、こつちの努力不足だもんね。悔しいじゃない？」

「ははー……」

古都は溜息をついた。彼女の「先生の気持ちになつて」張るヤマは定評があつて、成績もいいのだが、そんな真面目なガッツはない。

「もお、姉さんに珈琲一杯奢つて無限に得点力アップの計画は既におじやんだよ」

「しかたない、しかたない。次がんばろ、次。期末を」

「中間も始まってないうちから諦めんなよ」

「次。次こそ毎日コツコツ……」

「いまからコツコツしろ!」

「偉そうに言うな自分だつてしてないのに!」

「ああそうさ! ドーナツ食つてやる!」

「まずは食わないとね!」

「ふふ」

なんかさつきまでコチヨコチヨ考えてのが、バカみたい。ありすが聞いた。

「ユミ姉さんは、志望校とかもう決めてらっしゃるんですか？」

「んー……まあ、一応。やりたいことあつてね、その研究だと、一応そこが世界的にも有名なので、できれば、そこへ……」

「「ふわー……」」

六人まとめて嘆息した。そうか、1年だと、はるか遠い先の話か。私だつて二年前は、こうだったろう。

「凄いデスね、立派デスね、ユミ姉様は」

「ううん、立派でもなんでもないわよ。種明かしをすると、父がそっち系の研究者なので、じゃ私も、みたいなーかげんな動機で……」

「「ふわわわわ……」」

逆効果だった。お父さん学者。それ凄い。自分も学者になる。それ立派。

「や、や、研究職特に文系はなかなか厳しい世界なので、そう簡単になれるとは思ってないわよ。まあ、やってるうちに芽が出れば、で。ダメなら普通に就職。でも文学部は就職厳しいのよね、実際は。だから英語と、それからスペイン語かな、そのへんしつかりやとこうとは思つてて、ほら、つぶし効くじゃない? これからはヒスパニック系、中南米も経済発展が……」

「「ひゅへへへへ……」」

話せば話すほど、すっかり前を見据えてる大先輩に恐れをなすのんきな1年生。

なんか自慢してるような、偉そうに先輩風吹かしてるような、くすぐったさに、照れる。

「いや、えーつとまあ……そんな感じで、やりたいことあると、勉強も、自然とやらなきゃ、つて、思うわよ」

「な、なるほど」

「可憐だって、ほら、代表のエースになりたいからこそ、普段の練習、頑張れるでしょ？ 同じ」

「そ、そうですよね！ よおおおし！ あたしも明日から頑張る！」

「勉強をか！」

「サッカード！」

「あははははははは」

あまりにわかりやすい漫才に、ユミも笑った。癖で、髪飾りを弄る。ユミは細いカチューシャかヘアバンドでおでこを出す髪型、いわゆる（男性）総髪で、秀でたおでこが真面目なキャラにすごく似合う。のだが、そのうち肩に掛かる左の髪の一房に、ちよつと個性的な、ちいさな髪飾りがくくりつけてある。玉に、羽根。民族調だ。

「……そういえば、前からお聞きしたかったですけど」

横からありますが尋ねた。ミスマッチが不思議に似合ってる、姉さんの、お洒落ポイント。

「その髪飾りは、なにか由来あるものなんですか？ いつもお付けですけど」

「……ああ、これ？」

……外して、テーブルに置いた。

「これ自体には無いんだけど。これはレプリカで」

「レプリカ？」

「えーつと……話せば長くなるんだけど、いい？」

「もちろんッス！」

ユミはその羽根細工をコロリ、と指先で転がして、珈琲を一口。

「……族長さんからの、贈り物なの」

「「族長さん!」」

現代日本では聞きつけぬ言葉だ。

「……父が文化人類学系の研究者でね。で、フィールドワークと言って、あまり文明化の進んでない部族に直接お邪魔して生活を共にして、研究する、つていうことがあるのね」

「槍持ってシマウマを追うんスカ!？」

「その時はアマゾンの奥地だったので、もっと小獲物を弓で狙ったかな。まあ、そんなこともするの」

「こつ、腰ミノで!？」

「ふふつ、それに近いカッコだったかな、実は今はもう、そういう部族世界中探してもほとんど無いのよ。とても貴重な人々」

「じゃあ姉さん、まさかそこへ……」

「うん。中学生の時、ある合同調査隊に、私も連れてってもらえることになって」

「連れてってもらえる、って……ジャングルの奥地ですよね!？」

「もちろん。私以前から行ってみたくて」

ニッコリ。

女子中学生がアマゾンの奥地にか……やつぱりユミ姉さんも、すこし、変わっている。

生来冒険心のある人という人種は居て、女子高生が世界の果てまで旅をしているんなことにトライするTV番組が人気になったりもする。きつとこういう人の先祖が、遠くアフリカからユーラシア大陸を横断して日本に到達したのだろう。

しかし、アマゾンである。

「でも、學術調査隊に中学生の女の子って……」

「それがね、TVの紐付きなのよ。局の何十周年かのスペシャルドキュメンタリーで。まあ、TV局としては研究者の娘と現地の子どものたちの交流、つていい絵じゃない？」

「なるほど」

「じゃあ、お父様は世界的な博士でいらつしやいマスか？」

「ふふ、そんなこともないんだけど……まあ、見てくれがクマそのもので、細かいこと気にしない人なので、TV映りがいいのよ。あ、写真あるよ」

ユミ姉さんは、教科書やノートが整然と詰まった鞆から、これも革装のとても美しいA5版のスケジュール帳を出した。

もうなんかやつぱり出来る人って身の回りのモノの持ち方から違うわ。ピシッとしてるんだよね。

最後にクリアポケットがあつて、そこに写真が数葉。

「わ、素敵〜!」

「ほんとだ! ワイルドで」

「いいな。優しそうなお父さん」

なるほど、いわゆるフルベアードのヒゲ面、ぽこりとお腹の出た幅広い姿、チェックのシャツとポケットの多いズボンがいかにアウドア、そしてその笑顔はあまりに人懐っこく、クマはクマでもいいクマさんだ。

その時、つまり数年前だろうか、少し幼くて可愛い姉さんが、肩を抱かれてはにかんでいる。同じような服を着ている。そういえば、キリリとした眉、意志の力の強い瞳が、そっくりだ。

しかし連れてく方も連れてく方なら、ついてく方もついてく方だろう。

「ほんととは学問的には観察対象に変な刺激を与えるのはよくない、んだけど、まあ、割と研究の世界でメジャーな部族で、フィールドワークも何度入ってるし……ってことで。割といーかげんなのよ、うちの父。見た目のまま」

「いやでもアマゾンの奥地でしょ? お風呂とか無いんですよ?」

「もちろん。街に帰るまで一度も入ってなかったからね、お風呂入るとね、前もってシャワーを浴びたはずなのに、なにかいろんなものがいっぱい浮いてきて、水面が見えなくなるほどに……」

「うええええ〜」

「ありすとか、ムリだな！」
「死ぬと思う」

顔をしかめて本気でそういうありすは大の風呂好き、普段から一時間はざら。「人魚になりたい」とまじめに言う。いや、人魚が風呂入るかどうかはコペンハーゲンあたりまで行かないとわからないが。

余談だがこの、風呂好きの表現に「人魚になりたい」と言い放つのがありすのキュート・ポイントであり男子はこれに悶死、狙ったものではなく天然なので女子も「まあアレはしょうがない！」と怒気を含めた黒い何かを吐く。

で、なければ「天使」などというニックネームはつかない。微妙に浮世離れしてるところもよく表している。

ちなみに1年生で「天使と天女のツートップ」と称される天女の方は、いつもどおり人の話を聞いているのか聞いてないのかわからない大和撫子伝統のアルカイク・スマイルのままエンゼルデイパンくま抹茶の目鼻口を表すチョコのみをいでは食べもいでは食べ、次々にタリバンのロケット攻撃を受けた石仏のようなドーナツを量産している。これは描写しなくてもいい風景。

「……十日ぶりのお風呂も、さーっぱりして気持ちいいよ。一回目のシャンプーがね、なにをどうやっても泡立たないの」

一方そんな極限状態を姉さんはニコニコ笑いながら話す。本質的に好きなのだ、そういう「変わったこと」が。

ああその親にしてこの子あり。

「食べる物とかも、現地のを食べるんですよね」

「もちろん。でも私、食べる方は結構何でもOKだから、美味しくいいただきました」

「ふひー。あたし風呂はともかくそっちが無理だなあ」

「なに言ってるんの、あんた鉄の胃袋じゃん」

「いやいや、だつてさ、うまいもんならいくらでも喰うけど、ゲテモノはムリっしょ」

「ゲテモノっていうほどののは、無かったかな？ 強いて言うならカエル？」

「わ」

「じゅーぶんゲテモノッス！」

「アッ、でもカエルはフレンチや中華で出ますネ」

「そうそう」

「さすがエレナ国際派」

「オイシイデスよ、鳥のササミみたいに、あつさりデス」

「やーダメだダメだ、生きてるところが想像できちゃうのはダメだ」

「なーんだ、ちー意外に脆いなあ」

「うっさいなあ、あんたもいくら前世がキツネだからって、生肉とか貪り食わねーだろ!？」

「ユッケなら食べる」

「そおじゃなくてさー」

「エスカルゴなんて、カタツムリデスもんネ」

「いやまーそーいやそーだけどー」

「ああ、カタツムリといえば、虫はよく食べるわね」

カキーン。

場が凍った。

ここはほのぼのファミリーの集う、昼下がりの明るいドーナツ・シ

ヨップ。ここで余計なこと言わせたら天下一品、主砲・明日葉が火を噴いた。

「虫つて、美味しいんですか!？」

「ええ。タイとか行くと露店でいろんな虫が山になって売ってるわよ。タガメにガムシにサソリにコオロギ、あと何か知らない虫も……」

「わーっ！ わーっ！ わーっ!!」

可憐と千里が涙目でディフェンスに飛んだ。

姉さん……デンジャー過ぎる。姉さんにこんな危険な一面があつたとわ。

「あら、私たちだつて、二千年前には食べてたのよ？ いまでも『蜂の子』つて珍味じゃない。ざざむしとか」

今は二千年後です。

「あつ、でもあそこでは食べなかったかな……シーズンじゃないとかなんとか」

「シーズンあるんですか……」

「ええ。虫取り名人が言うには美味しい時期つてあるらしくつて。すごいわよ、土の中にいるの勘でわかるらしいの。それをこう、棒で掘り起こすと丸々と太った」

「もおやだあ!」

「千里ダメよ、偏見は。他の文化圏の人から見れば、生魚切り身にして食べてる私たちだつておかしいんだから。姿造りとか、よく考えれば残酷でしょう？ まだ生きてるみたいにピチピチ跳ねて。白魚の踊

り食いとか丸呑みじゃない」

「ぞうでずげどー」

「そつ、そおいえば姉様はお寿司が大好きデスね!」

「あ、うん、そうね、好物、かな」

ナイス・エレナ。

「そ、そうだよ凄かったよな前みんなで行ったとき！ 普通さ、一皿、一皿、選んで取るじゃん?」

「姉さん最初から選びもせずに五皿順番に取つて『いただきます』だつたもんね!」

「だつてパックで買うと一〇貫ぐらい入ってるでしょ?」

「いやそりやそうですけど」

「ほんでさあ、なくなるとまた五皿その上に積むんだよね!」

「だつて二パック目も一〇貫入ってるでしょ?」

「いやそりやそうですけど……それがなんか延々続いたような記憶が……」

「なんかバベルの塔みたいな皿タワーが五本、立つてたよな!」

「父の血が濃いのか、割と食べる方はいくらでも入るのよ、私。ほら、フィールドワークは体力勝負だから」

フィールドワーク今関係ない気もするけど……

「あ! そうだ食べた食べた、畑にいたバツタみたいな焼いて食べた」

「「わーっ!」」

「パリパリしてまあまあだった。沢蟹の素揚げ? あんな感じ。あんな感じ。」

なに美味しくないけど」

「「……」」

普段は優しい姉さんの時ならぬ猛攻に、もうマジ泣きの可憐と千里。ありすなど眼も閉じて小刻みに震えて五感すべてを閉ざしている。

「しょつ、食生活はこんどお伺いしますので、で、どうしたか、未開生活は！」

「ああ……うん、楽しかった」

ニツコリ。それが楽しいのか……「ユミ姉はチーム一の常識人」という定評がガラガラと崩れてゆく。

「私思うんだけど、やつぱり楽しさって、『普段と違う』ってことなのね。普段ご飯を食べてると、パンも、イモをすりつぶした物を焼いたものも、楽しいのよ」

そうかなあ。

「凄いわよお、夜中とか。満天の星がね、宝石箱みたいに輝いてる」

「あつ、それはちよつとわかります！ アタシもスキー行った時に経験！」

「でしよう。」

それで夜中ね、まったく物音の聞こえない闇の中から、獣とか鳥とか虫とかの鳴き声が……」

また虫だ。

この人はナウシカか。

「怖いですう」

「大丈夫大丈夫。だって村のみんなはいつもそうして暮らしてるんだもの」

「やつぱ姉さんつおいわ。」

あのガッツはそういうサバイバル経験で培われたものなのか」

「サバイバルじゃないってば。子どもたちも可愛かったし」

「あつ、そうですね、子どもたちもいますよね！ お友達に、なったんですか？」

「うん。」

最初は遠巻きだったんだけど、すぐ仲良くなった。子どもって偉大だよ、好奇心と挑戦心がすごいよね。誰かが近づいてみて、敵じゃないとわかるとワツとこう」

「言葉とか、関係ないんですね」

「うん。」

私も最初はどうしていいのかわからなかったけど、ふと、お手玉とかがしてあげたら目を輝かせ」

「ああなるほど」

「あ、そうか、と思って、あやとりに缶蹴りにケンケンパ……あたりまえだけどみんな知らない遊びだから大興奮で」

「そういや子どもの頃なんであんな単純なこと日が暮れるまでやってたんだろ、って思うなあ」

「単純だから奥が深いんじゃないかな」

「一番喜んでもらえたのは折り紙かな……」

「おお！」

「それはたしかに、ジャングルの奥には無さそうですね！」

「女の子には折り鶴、男の子には紙飛行機。大ブームになったわ」

「わあ……」

「わかるなあ、いいなあ、そういう感じ」

「ふふ、折り紙は教えてあげると自分で作れる、というのがいいところよね。」

でもホントは、そういうことが一番やつちやいけないことで、あとで父がたいへん叱られまして、あれは父に悪かったわ」

「ああ……そうですね、部族の文化が、変わっちゃいますもんね」

「映画観たことあります、『ブッシュマン』」

「そうそうまさにそれ。」

コーラの瓶一本が、部族に混乱を巻き起こす。

父はそういうところ気にしないとおおらかすぎるところあるので、ホントは研究者というより冒険家とかの方がいいのかもしれないんだけど……ま、でも、そういうおおらかな人だから、相手の部族の人にも直感的に敵じゃないと判断して受け入れてくれるのかもしれないし、痛し痒しね」

「やつぱり、お父様も人気者に？」

「ええもう。私見てる範囲ではいつも呑んだくれてた気がするわ」

「あはははは」

「でもそれも大事なコミュニケーションらしくて、やつぱり酒席・宴席でないと出てこない話や歌や舞踊、言い伝えに神話、それがあるのよ。それ引き出さないと」

「な、なるほど」

「呑んだくれといえば」

ユミは遠い目をして、思い出を繰る。

「……父と一緒にいつも呑んだくれてる若者がいて、彼はとてもぐうたらなの。狩りにも行かないし部族みんなでやる作業みたいなのもサボって、いつも寝転がってるの。」

やつぱり文明の力がないと、みんなで力合わせなきゃ今日生きるのも大変じゃない？ なのに、そういう人がいて、みんなそれを許してるのね」

「はい」

「父を経由して部族長になぜあの若者はそれが許されてるのですかと聞けば……なぜだと思う？」

「有力者の息子！」

「芸術家！ キリギリスさんですー」

「トリュフ見つけるのがお上手で、シーズンオフはお暇、とか……」

「わかった。コーチみたいな女たらしッスよ。貢いでもらってるの。女性陣に」

ハハ……と妙に乾いた笑いが起きて、

「神官……聖職者ですか？ お祭りの時に活躍する」

「ありす近い。」

「答えは……生贄」

「「ええーっ!？」」

「普段はいいんだけど、村に厄災……たとえば疫病が流行ったりした時に、神様に祈るのね。その時、心臓を抉り出される、役」

「うぎやーっっ」

「……それは、もちろん、その人は、知ってるわけ、ですよ」

「うん。なんだかね、前の役目の人が死ぬか、あるいは役目を全うした後、成人する男性の中から選ばれるらしいの」

「うわぁ……嫌だなあそんな人生ー」

「うーん……私たちの価値観だと当然そうなるんだけど、でも、彼は、呑んだくれてる以外は、ごく穏やかないい人だったよ」

「達観……しちゃってるんでしょか」

「それもあると思うし、まあ、それもみんなの役に立ってる、とも言えるしね」

「そうですけど……」

「だから、進路悩めるだけでも、私たちは幸せよ」

自分にも、言い聞かせるように言った。

上を見ればキリがないし、下を見ればキリがないし、横を見ても、キリがない。

たいせつなのは、自分がどう感じるか、だ。

「ああぶるぶる、勉強しよ。せめて生贄役には選ばれないようにしよ」

「ちーは大丈夫だつて。生贄ならエレとかもー先輩とか、もう少し肉付きいいのを選ぶ」

「わたしデスカ!？」

「でも、そういうおはなしを聞いてると、楽しそうですー」

明日葉がまた瞳を余計に輝かせた。

「そ。」

「ぼんやり『お父さんみたいな仕事いいな』って思ってたのが、『あれをやろう』に変わったのは、やっぱりその時かな」

「いいはなしだなー」

「……でも、楽しい日々にも終わりは来る。」

別れの日は、辛かったなあ……

私ね、親類縁者がみんな健康で、近しい人で亡くなった人ってまだいないのよ。もちろん友だちでも。だから……『永遠の別れ』っていうのが、その時初めてで」

「あつ、そうか、さすがに、何回も、いけませんよね、そんな奥地」

「そう。」

「だからもう、この子たちと一生会えないのか、と思うと切なくてね……その子たちがまた『もう会えなくなる』っていうことがどういことかまだわかってないキラキラした目で私を見るのがまた辛くて……ごめんなさい」

思い出して涙ぐむ。ハンカチを当てた。

まわりもちよつとうるつと来る。

「でも最後の日になるとさすがに『別れ』ってものがなんなのか分かってきたらしくて、みんなへばりついて離れないのよ。それをお母さんお父さんや族長さんが諭してね。私も思わず、わんわん泣いちゃったんだけど」

姉さんでも、わんわん泣くのか。

そんなところを、見てみたい気もする。

「その時、別れの印に頂いたのが、これ。……の、オリジナル」

テーブルの髪飾りを、転がした。

「『クマは我が息子、ユミは我が孫』

……族長さんそう言ってくれてね。飾りの色や形はおうちによって違うの。だからこれは、族長さんのおうちの。あ、クマっていうのは父のニックネームで、本名は謙造っていうんだけど」

「いいなあ……」

「まあ、自慢になっちゃうけど、父のおおらかさのおかげよ。私はただ遊んでただけだから」

「いやいや、ユミ姉さんの人徳もありまつするよ!」

「私だったら、ずっとテントかなにかに引きこもっちゃいます」

「ふふふ、でも、人間って意外に、適応力あるものよ? 最初は遠慮してたTVクルーも、若い学生さん達も、最後は宴会ではっちゃけてたし。こつとんだって、現場にいけば、みんなと一緒に駆けまわってるかも」

「腰ミノでな!」

「もーちーちゃんそんなに腰ミノ好きなら自分でつけばいいじゃない?」

「オレが着けたら洒落になんないだろ?」

「威張るな」

「でもそれは……ステキなステキなプレゼント、デスね」

「うん。私の宝物。」

だからオリジナルは額装して机に飾ってて、写真見せて母のよく行くアクセのお店に作ってもらって……あ、これこれ。これがオリジナル」

さっきの写真入れから、一葉。

なるほど、実物は遙かに立派だ。サイズも大きいし、色も鮮やか。細工も細かい。

きつとこれを、部族の人々は、母から娘へ、父から息子へ、継いでゆくのだろう。

「だいじなものもあるけど、さすがにこれつけて学校はこれないでしょ?」

「確かに……でもこれぐらいならイケますよ! がんばれば!」

「や、無理してつけてこなくても」

「私だったら、全然平気ですよ!」

「あんたはな。頭ん上にこれ一〇本ぐらい挿して来ても誰もなにも言わないと思う」

「一〇本……いや、二〇ぐらいは……こう、お花畑のように!」

「真面目に検討するな」

「ああでもないおはなし聞きました。

感動です」

「いやいや、こんなの別に。だって私にか偉いことしたわけじゃないからね。父と調査隊とTVクルーと、それから暖かく受け入れてくれた、部族のみんなのおかげで、私が一番、楽しい思いをしました」

そうだろうか。やっぱり、謙虚で折り目正しく、人に敬意を忘れない、そう私たち1年生にいまもそうしてくれるように、ユミ姉さんだからこそ、愛されたのではないか。

その姉さんは、パツと顔を明るくして、

「……そうだね、久々に思い出して、ちょっと元気が戻ってきた。あの生贄の人みたいに、私だってチームに役立ってること、あるよね」
「なーにをおっしゃいますやら!」

千里が手首を折っておばちゃん式ツツコミを入れた。

「姉貴が前に居るDFチームであたし楽しんでますよ、ずっとバイタル（DFとMFの間のスペース）締めてくれますからね」

「んー……そりゃキャプテンは自由に動くから、GKとしてみればそうでしょうけど……」

「ユミ姉様がおられなければ、わたし、不安デス……」

「でも、キャプテンが的確に指示出してくれるでしょ？」

「はい、あの、指示は的確、なんですが、えと」

「美緒さん、とても的確なんですけど、いきなりすごく重い荷物を『はいこれやって』ってズドンと乗せることがあるんです」

「あつ、あつ、そんな感じデス！」

ありすの発言に、みんな「あれだ」と思うプレーがあつた。オーヴアー・ザ・レインボー。あれはたしかに、ありすにとつてはいきなり上空三〇〇mで綱渡りをしろ、と突き出されたようなプレーだと、言えなくもない。

「それで失敗してももちろん叱られたりは絶対しないんですけど、重いのは重くて……」

「キャプテンそのへん凄く合理的なんよ。自分の中では五五で出してるので失敗は織り込み済みなんだろうけど、ま、出された方はミスるとガック来るよね。わかるわかる」

可憐はサッカーのことなら、突然賢くなる。

「ユミ姉様は、そんなことはなされないので、プレーしやすいデ

ス！」

エレがまた、ニッコリ笑う。

それは……まあ……そうかもしれないけど、たぶんチームとしては、勝つためには、美緒キャプテンの方が、いいんだろうなあ……
なんか誉められてる気はしないが、ま、悪い気もしない。

「ま、その前に私パス下手だしね。今日もマキに怒られちゃったし」

「いやいや、あんなのいいんですよゴール前クリアだと思えば。誰も彼もがね、キャプテンみたいな鬼プレーじゃなくていいんです」

「そーだよ美緒さん後ろに目、ついてるよな！」

「後ろから来たボールをダイレで遙か遠いところ走ってる流乃さんやナナさんに出したりするでしょう。あれ、おかしいですよね」

「GPSを改造手術で取り付けてもらったんですよ、きつと。死神博士に」

明日葉のたとえもまた古い。家が古いからか。

しかしまあ、内容はそんな感じ。

「ユミ姉さん、絶対あんなの真似しちゃだめですよ。あんなのできるジダンぐらいのもんで。姉さんは、マ……カ……え……レ、レ、レレレのレ」

「誰だ」

「マカレナ？ ♪はんなはらはらはらはらへ〜」

「明日葉、人が何かを思い出そうとしてる時にうる覚え鼻ソングはヤメなさい」

「リアル、リアルの人。勝つとか負けるとか。ジダンと一緒に」

「ジネディーヌ・ジダンと同時期の……あ、この人かな。クロード・マケレレ、フランス代表」

「そうその人！」

「おう、カレにしてはかなり近かったな」

「まかせてよ。サッカーのことは」

「当たりました！」

「「ハズレてるよ」」

素早くスマートフォンでweb百科事典を検索する古都。読み上げる。

「……当時『銀河系軍団』と呼ばれたスター選手揃いのレアル・マドリードにおいて、中盤底でハードワークを担当、チャンピオンズ・リーグ優勝の時はチームメイトから『彼こそ俺達のバロンドール（最優秀選手）だ』と讃えられた……」

「ビデオ観るとホントカッコイイですよ。中盤のボール全部獲っちゃう」

「へえ……」

「この人がまた凄いのが、パス能力全然無いです。『3m以上のパスは出せない』とまで言われたぐらいで」

「へえ！」

そんな人でも、世界一のクラブで、世界最高の働きをして、世界屈指のスター選手達から、讃えられるのか。

「それでも大活躍できるんで、パスなんかディフェンシブハーフには要らないんッスよ」

いずれは代表の9番を担う逸材に、そう言い切られては、そんな気もしてくる。

「もうね、日本代表は伝統的にテクニシャンを好みすぎるんです。サッカーは、テクニックも大事だけど、もっと大事なのはガッツと根性、これですよこれ！」

腕組みしてウンウン頷きながら言う、テクニシャン。それはお金と同じで、「持つてる人はみんなそう言う」という気がしなくもないが……

画面には、小柄で体格も普通の黒人選手がいる。一七〇センチ、六六キロ。顔立ちも鬼やブルドッグの類ではなく、いたって普通の人だ。この人が、世界最高峰の守備的MFとは……

なんと守備的MFとは地味な存在なのか。思わず本音が出る。

「……でも、もうちょつとヒーローっぽい方が、いいかなー……」

「あら、姉さん意外に面食いですか」

「ううん、お顔は別にいいんだけど、悪役なら悪役で、もっと悪役っぽくキャラの立った……」

「無理して悪役やらなくてもいいじゃないですかー」

「それ二〇本挿して駆け回れば、悪役ですよ！」

「明日葉……」

たぶん反則です。

「あつ、でも姉様、この選手、スーパーモデルと結婚したんです

よー！」

「へー」

「できる男はモテるんですね、やっぱね！」

「そっか」

それはそうだろう。ありすが言う。

「……そのへん、コーチとじっくり話しあってみられてはどうですか？ コーチそういうのお好きですから、きつといくらでもお話ししてくれるかと……」

「えっ？ ……ま、まあ、私みたいなのに時間取らせるのも悪い気がするし……」

「でも」

「じゃあプライベートツスよ！ ウヒヒ、デートデート。デートに誘って、それとなーく」

「「ええええええ？」」

千里のヨタに、周りが過剰に反応した。ユミ、苦笑い。

「私、血の雨は浴びたくないわ」

「だ、か、ら、理由をつけるんツスよ！ なんでもいいーんで、テキトーにー！」

「理由？」

「サッカーの本探したいから付いてきて、とか！

あ、そう！ 姉さん、その眼鏡、新しくする、とかどうです？」

確かに、ユミの眼鏡は作ってもうだいぶになる。扱いが丁寧なので

痛んではないが、銀縁のいかにも優等生型、サイズも大きめで、最近の流行りではない。ちょうど眼鏡は替えたいかな？と思っではいた。

「あー……うーん……」

「そんなんが許されるんだったら私だってそうします！」

「こつとんなに興奮してるの」

「だって、それだったら別にコーチじゃなくても、3年の、えー……3年の……」

もも先輩、ぐでぐで、マキ先輩、野生児、忍先輩、江戸時代、くー先輩、猫。以上終わり。

「だめだろ!？」

「……ちーちゃん、意外に考えてるんだね」

「つたりめーだ、オレは悪知恵の時はびゅんびゅん頭が回る」

「サッカーの時回しなよ」

「お勉強の時にー」

「姉さん、私が行きますから、私がついて行きますから！」

「ふふ、ありがとう。」

そうね、私みたいな素人がうじうじ考えるより、コーチに尋ねるのが一番、だよな」

「そおですそおです。」

んでー、もしデートがうまくいったらー、コーチの好きなものとか好きなこととか教えていただいたらー、あっしがその次に上手に応用を……」

「んな度胸ねーくせに」

「いやっ！ 度胸はある！ 足りないのは情報だ！」

「情報が足りない時に動かないのを、度胸がないって言うと思う」

「あーちゃんは時々辛辣だね……いや、戦いは、始める前に、必勝を期せるまで準備を整えて……」

「情報ならー」

あ、また主砲だ。余計な砲弾が固めたベトンをブチ・破る。

「キャプテンに聞けばだいたいのことがー」

「すいません珈琲とカフェオレおかわりもらえますかー!」

「あー……今日もモフモフがおいしい」

「ポイントあと3点でサランラップもらえる♪」

全速でそこから撤退する。鬼の話をすると来年が笑うという。

「マケレレ選手ステキデスねー。ミッドフィールダーのお手本デス」

「そう! 姉さん、マケレレの上を行く、カツレレですよ!」

「うるさいよ」

「フツ……フツ、そうね、がんばるわ」

「あつ、そういえばコーチは以前おっしやつてマシタ」

エレーナが、回想した。

「どうしてわたしなんか使うんデスカ、って聞いたたら……ユミ姉さんは『明らかな目的を持って後から突っ込んだ方がより生きるんだ』って」

「コーチが?」

「ハイ」

「あつ! それを言うなら! 今日おっしやつてましたよ、コーチ。」

ユミ姉は、『替えの効かない替えの選手だ』って」

「……」

……うれしい。

確かにスタメンの方がいいに決まってるのだがしかし、そんな風に言われたら、燃えるじゃない。

……つたく、あの子は人をノせるのが、巧い。

やはり、たらし。

しかも本人には言わず周りに言ってるところが、また。

悪口は直接、褒め言葉は間接。鉄則だ。

「ユーミ・カツレレ! ほらなんか東欧の選手みたい!」

「もういいから」

「あでもユーロ予選とかワールドカップ予選中は、マケドニアって国、国名をカツドニアに変えるらしいよ!」

「んなわけあるか! 誰に聞いたそんな話!」

「兄貴」

「一〇〇パー嘘じゃねえか……お前も兄ちゃんの言うことだからってなんでもかんでも信じんな」

「えーけど兄貴地球中いろいろ行ってるしー。ユミ姉さんみたいに」

「」

「頭の出来が違うだろ頭の出来が」

「あつ、兄貴に言うぞー」

「いーよ別に太陽さんあたしみたいな眼中にないだろーし」

「いやつ。兄貴わりと女嫌いだから、ちーみたいなの逆にいいかも」

「ほっ!? ホントかおい! 撤回撤回、シャイニング・サン最高!」

よっ！ 次代の日本のエース！ 将来はリアルかな、ユヴェントスかな、ユナイテッドかな〜」

「いーってやろ」

「ちょーやめてくれよマジでー。ただでさえあたしの数少ない欠点の男の香りの漂わなさがますますー」

「自分から香ってるからな！」

「いーかげんロック・スピリッツを理解しろよカレン。いいか、だいたいなことには男も女も無いんだ」

「の割にはちゅーとはんぱに胸とかあるからボーイッシュでも無いしなあ。髪型も中途半端に可愛らしさに未練があるんだよね。いつそ丸刈れ」

「ホントうるさいねアンタは!!」

わいのわいの。

賑やかな1年生の真ん中で、すこしあつたかい心で熱い二杯目に口づけながら、ユミはさつきまでの小さくて狭い自分を、可笑しく思った。

そう、世界は、自分なんかより、ずっと広い。

■ 誘い出す

しかし、「デートに誘う」などということがそもそも、上町大地相手には至難の業だ。

いえ待って、デートとかじゃないデートとかじゃない。そう、守備的MFとしてね、なにが必要なのかを聞き出すために、そのために眼鏡を買いに行くということにして、えー……

ユミ、こつそり2年の廊下をさも用事でもあるかのように歩いてみた。2―B。

ギャハギャハ笑ってるいつもの面々、空堀君、ナナ、蘭、愛、はなこ、流乃、そして上町大地とすぐ横に……地球最凶のディフェンシブハーフがガッチリガード。

『……むり。』

根性娘・八尾由美子をもつてしても瞬即諦める隙の無さだ。

上町大地は、モテる。

チームを指揮するようになってから、精悍さやまとうオーラが、ぜんぜん違う。だって1年生の頃の彼なんて、存在さえ知らなかったもの。あ、違う、キャプテンにどうも彼氏のようなそうでもないような人がある、つて噂は聞いたことあったけど、それがあの昼行灯のような、ぬぼーと背丈と体格だけいい上町君だったとは。

それが今や学校中の女子がキャーキャー喚き散らすアイドルだ。

人は、変われば変わるもの。

ええ、確かに美少年でね。大きな瞳とさらさらヘアーが少年のようで、でも体格は良くて背筋が伸びてて。また切り替え、ギャップがいの。練習中は

「ユミ！ ツツコめ！」

と自然に身体が動いちゃうような激しい声で怒鳴りちらされ、練習が終わったら甘い声で

「……姉さん、おつかれさま」

とていねいにやさしく、しかもとびきりの笑顔で。

と、ユミが妄想と現実の狭間で愉しんだと、その上町君が立った。む。どうやらお手洗いかなにかか。

チャンス!? 天佑神助!

教室を出て二三歩のところで、後ろから声を掛け……

「あつ！ あの、コー……うえ……うえ……」

コーチ？ 上町君？ こんな時は、どっち？

「？ あれ、姉さん」

ニコっ。

「あ、はい、こんにちわ」

「どうされました？」

「あ！ えとあのね、ちよつ、つとつきあってもらいたいことがあつ

て」

「ええ、なんです？ 僕にできることなら」

ニココッ。

「あのね、めがつ、眼鏡、ちよつと替えたくて、それでちよつと付き合つて欲しい、かも？」

「眼鏡？ はあ、僕はいいですけど……でも、そんなのなら……」

ユミ、盛大に冷や汗。

ですよねー、そんな用事で顔なじみだといつてもクラブの後輩の男の子誘うなんて、そんなの、露骨過ぎます、よねー。

が、上町君はちよつと黒目を上にして考えて、

「……なんとなく、わかりました」

と苦笑いした。どうやら古都と同じ回路が回ったらしい。

そんなに変？ 3年生って？

「あでも、それならおはなちゃんはどうです？ お洒落ですよ、メガネもいっぱい持ってるし」

「あつ、いや、はなちゃんセンス良すぎるから！ 私あんなお洒落メ

ガネ似合わないし！」

「えー、似合うと思うけどなあ」

ニッコリ。

もう、なんでそういうくすぐりがパツと出るかな。

「それか美」

「今日でもいい!? いきなりだけど今日ちょうど練習無いし!!」

「あ、ええ、いいですよ。僕も暇です」

「よかつた」

もう、その人来ちやつたら本旨とズレちゃうじゃない。

……いや……本旨から言えばそっちの方がいいのか……いや……いや……

「……あのーできればそれで、このことは内緒にして欲しいんだけど」

「は？ はあ、僕はいいですけどえと……なぜです？ メガネ買うつて、人に言えないことなんですか？」

「あの、いきなり変えて、みんなを、驚かせようと、思つて」

「はあ」

これも厳しいなあ。

由美子は生真面目生一本で生きてきた真人間である。嘘を付くとか適当を言うのに、極めて慣れていない。

「スゴイの買っちゃうんです？ こう、ガラスのここハート型になつてるような」

「あははははは！」

ゲラしちやつた。上町君……時々変だ。

でもそれで、ちよつと気が楽に。

「んなわけじゃないじゃない。まあ、あの……」

乙女心は、複雑なの」

「はあ。」

わかりました。姉さんの頼みとあらば、僕なんでも聞きますよ」

ニコニコニコニコ……

くらつ。

ああ……ダメだ。私今日半日もつかしら。

ユミにもリアル弟がいるのだが、五つも離れて中一なので、こういう、頼もしさというか、「男の子らしさ」みたいなものは皆無で……

「姉さんの頼みとあらば」なんて。

取り替えたい。

いやいや。なに言ってるの馬鹿、

……一人追加で。

「じゃ、じゃああの、駅前の『Simple』集合で」

「直接『シンピュア』で？ えっ、校門前とかにして一緒に歩いて行きますせん？」

「いや……」

たいへん魅惑的な提案だったが涙を吞んで断る。んなとこ誰かに見られてみる！

「……ちよつとその前に、寄るところが、あつて」

「そうですかあ。残念。」

姉さんと一緒に、散歩できるかと思ったのに」

ニコ・コココ。

ああ……ほんとダメだこの子……

ていうか美緒ちゃんよくこんなの横ついて死なないわね!!

「わたしも、超残念、だけど、ほら、歩くのは、お買い物中でも、できる、から」

「そうですね。」

ふふ、デートみたいだ」

しまいにや殴るぞ。

「はい、では、よろしくおねがいます！」

いたたまれなくなったユミは目をつぶってダッシュで撤退を開始した。もちろん撤退する敵を追撃するのは、兵法の鉄則。

「……楽しみにしてまーす！」

階段を駆け上がる頃にはなぜか涙が出てきた。

あれはヤバイ、あの子は、ヤバイ！

「……ユーミい、どーしたの？」

3年の廊下でもに見つかった。肩で息する私に、怪訝な顔をして
いる。

「はあ、はあ、はあ、もも」

「なあに？」

「私たち……優勝、できるかも」

「はい？」

あ、うん、もちろん、狙うは優勝、だよなー！」

ユミは去年に比べて格段に上がったチーム力の原因を、可憐やありますのような才能溢れる新入部員のおかげ、だと思ってた。

いや違う、奴だ。奴が、ひとの能力をその限界以上に引きずり出してるんだ。

私、だって、ここまで追い込まれて学校の廊下走ったり階段駆け上がったなんて、記憶に、無い。

「あ、ユーミい、今日こそ『エスポ』行かなーい？」

「あつ、今日もごめん！ 用があつて！」

「なにー？ そうだ、昨日用があるって、1年の子達とドーナツ食ってたらしいじゃなーい。なに、私たちのことがもう嫌いになったの？ むしろ私のことが!!」

「あ違う違う、昨日は用が終わった後だったの！」

「ほんとー？ じゃ今日もそれでもー」

「ううん今日はもつと大事な用事で」

「なに、それはー」

「……上町君とデート」

「あははははははははははははははは!!」

大口開けて大爆笑だ。

「あはは、ユ、ユーミには珍しい大ヒットギャグだよ！ あはは、うん、わかったわかった、嘘つかなきゃならない秘密の用事だね、うんうん、あははははははははは……」

しっつれいな……

と思つたが、去つてくれた。よしとせねば。

……失礼な……

——ということで、駅前『Simpleure』に駆けてきました。

『Simpleure』はその名のとおりSimple&Pure、虚飾や見た目の派手さを抑え素材や品質に注力したお店で、ちよつとこだわりの派手な人々には人気がある。ここは大型店で、地上六階地下一階に生活雑貨の数々から衣料品家具家電自転車、もちろん食品も。

一階入り口で秋冬新製品ポスターなど眺めてると。

「……あつ、お待たせしました！」

「あ！ いえ、うん、いま来たところ！」

「早いですね、僕も結構急いで来たんですが」

「ゆつくりしてくれてよかったのに」

「姉さん待たせちゃ悪いじゃないですか」

にこつ。

もう騙されない。もう騙されないわよ。

「……行きましょうか、メガネ二階」

「はい」

エスカレーターに乗る。

「ここ、メガネ売ってるんですね」

「うん。私も買いに来たのは初めてなんだけど、あるな、つて覚えてる」

「僕は知らなかったですよ。いつも来てるのに」

「あ、上町君もここよく来るんだ」

「ええ、美緒に連れられて」

キーン。

えつ、なに、それ、デー？

「服だいたいここで買うんですよ。シンプルで、着心地もいいですよ」

「え、ええ」

由美子、普段着の後輩を思い出す。だいたいジーンズに白いシャツ……ヤツめ。お揃いか！

「服も買っちゃおうかな！」

「おつ、いいですね、付き合いますよ」

とか言つてると、メガネ売り場。

「……あ、ほんとだ。……あ、割とお洒落ですね」

「うん、でもあんまり派手じゃなくて」

最近流行りのツルが太くて装飾強いのは、長年眼鏡に親しんでるからこそ逆になんとなくイヤ。

「これとかどうです？」

「あはは！ そーんな真つ赤なの学校に着けてけないじゃない！」

「や、はなことか、こんなので来ますよ？」

「えっ？ あー……あ、さすが美原さんね、全然違和感無いね」

一応、掛けてみた。

「……」

「……次、で」

「はい、キャラって、ありますよね」

「おはなちゃん美人だからなんでも似合うんだってば」

「姉さんだつて負けないぐらい美人じゃないですか」

「……」

上町君。うれしいんだけど、そこは「姉さんの方が」って言わなきゃ、だめよ。つてなに言ってるのあの美形と並べて貰っただけで悦べ？ 由美子？

「じゃあ、文豪みたいなこの丸い」

「ふふっ。」

「……んー……」

「微妙……ですね、おでこ目立ちすぎて」

「そうねえ。あと私目がちよつとキツめだから、丸眼鏡似合わないのよね」

「そんなこともないと思いますけど……あ、じゃあ最近よく見かけるこの、えーつと」

「あ、ウェリントンね。……どう？」

「あー悪くないですけど……ちよつとやり過ぎ、かなあ」

「市役所に二〇年勤務、つて感じね……」

難しい。キャラと外れてもダメだし、キャラに合いすぎてもやり過ぎる。

「やつぱりおはな連れてきたほうがよかつたかなあ」

「絶対口車に乗せられてお洒落すぎるの買つて、あとで後悔すると思う」

「あはは！ そう、そうなんですよこないだみんなでここ来て！」

「あ、2年で？」

「ええ。三十六がはなちゃんに『イケる！』つて乗せられて横シマシマの服買つて。実際その場では似合ってたんですよ」

「ふんふん」

「家帰つて着たら家族中から『囚人服だ』つて大爆笑された、つて」

「あははは……おはなちゃん、店員さんの才能あるかも！」

「そうです、はなに言われてると冒険したくなりますね」

「今日は保守的に」

「ふふ、そうですね。じゃあ……思いつきりシンプルに、これ、とか」

「ふむ」

ごく普通のハーフメタルフレーム、各パーツがとても細くて色も控えめで目立たない。スチャツ、と掛けると掛け心地も非常に軽い。顔に馴染む。

「「……」」

「……これかな？」

「姉さんそのままですね。何も足さない、何も引かない、つて感じ」

「じゃ、これで」

「あ、もつと見なくていいんですか？」

「ううん、上町君が選んでくれたものだから」

にこつ。

ささやかに逆襲してみた。

「……たいせつにして、くださいね」

に……

……もう二度と反撃など試みない。

——あのビュツと空気の出てくる何度やつても怖い検眼機で度を測つてもらつて、若い男性店員さんがハキハキと、

「……この度でしたら在庫ございますのでいまからお作りいたします。一時間後にはできあがります」

「はい」

「彼氏さんは、目はおよろしいです？ 検眼でしたら無料でやらせていただきますけども」

「あ僕大丈夫です。両方二・〇超えています。幸いなことに眼鏡要らずで」

「なにをおっしゃいますか、彼氏さんみたいなイケメンさんこそ、伊達眼鏡で遊んでいただかないと。眼鏡屋としては」

「あはは、そか、別に視力悪くなくても眼鏡掛けていいんですよ」

「そうです。私もレンズ作らなくていいので楽ですし」

「わはは」

「どうです、彼女さんとお揃いのそちらのあたりは」

「ええ、じゃあとで見てみます」

「どうぞよろしく。ご希望なんでもお伺いしますので」

「ううう上町君、いきいきしましょう」

ユミがギクギクと立って右手右足を同時に出して歩き出した。もちろん頭の中には彼氏彼女彼氏彼女彼女……否定してよ……いやしなくてもいい……いや……いえ……いや……

——地下一階のカフェ・ランチコーナーで、有機栽培珈琲とフレッシュジュースで一休み。

「……一時間長いですね、服でも見ます？」

「あ、そうあのね、」

今日の本題を切りだそうと思って、ふと、メガネの受け取り票にある数値が眼に入る。

「……わ、またちょっと悪くなってる……やだな、止まってくれないかな」

「ん？ 眼ですか？ どのぐらいなんです？ 度数だとわからなくて」

「〇・〇三とか四とか」

「両眼ですか!？」

思いがけず強い声が飛んで、ユミは顔をあげた。真剣そのものの、上町……コーチが、居た。

「え、ええ。小学生の頃からだんだん悪くなってきた、いまそんな感じ……」

「コンタクトとか、されてませんよね」

「え、ええ。私、将来ちょっとやりたいことがあって、そういう時コンタクトたぶん使えないので、慣れちゃうと逆によくない……かなと……おも……」

サーッ……

血の気が、引いた。

顎が震えて、言葉に、ならない。

……ということは、眼鏡を外すと、つまりピッチの中で私は……

「……」

「……」

「……見えて……ない……」

ぶわっ。

見えてなくなる。見えるようにしてくれるレンズの手前に、水の雫が溜まる。

慌てて大地、顔を崩す。両手を振って、違う違うと。

「いや！あの、怒ったりとか責めたりとかはしてません！いや、事実がどうなのかな、と思っただけで、」

「……」

涙は止まらない。頬を伝って、次々に落ちる。

「姉さん！ホントに！いや、そんな、泣かないでください！別に僕、いや、姉さん、ホントに！」

ふるふる震える、受け取り票ごと、上町君の手が私の手を包んだ。うん、それは、わかつてる。わかつてるの。でもそうじゃなくて、私、わたしが、ゆるせない。

「いやだって、姉さんのことだから、そんなの関係無いですよね、そうだと思います、だから」

「ある。」

……あるよ。私、見えてなかった」

私が長いパスがヘタなのは、センスが無いからだ、才能が無いからだ、向いてないからだ、と思ってた。違う。まず何よりも巧くなるための努力を、ちゃんとしてなかった。パス先ハッキリ見えてなくて、パスなんか出せるものか。

習慣というものは恐ろしい。

それが「あたりまえ」だと思い込むと、ボンヤリしたターゲットへアバウトに蹴ることに、なんの疑問も抱かない。

由美子のような賢明な、優等生にして、そうだ。

いやむしろそうだからこそ、かもしれない。状況に周囲に文句を言わず、努力で何とかしようとしてきたからこそ、自分が悪い、自分が足りないと思うからこそ……

「プレースタイルが、潰し役だから、」

「そんなの関係ない。そう思い込んでやるべき努力をしなかったのは……わたし」

「ユミ姉さん……」

もし。もし見えてれば、あの時、この時、その時。パスを受けてパスを出して、敵を止めて敵のボールを奪って。あのズタズタの一回戦、あの時、だって……

私は、私はなんて、みんなに、迷惑を……

「……上町君……私、辞める。」

選手辞める。でもミラクルズは好きだから」

「馬鹿言わないでください。怒りますよ」

ぎゅうつ。手を、握り締める。

「過ぎたことはどうでもいいんです。じゃあ、いまわかったんだから、眼を良くして、ボール見て、奪って、戦ってください」

「でも」

「僕には姉さんが、絶対必要なんです。眼が悪いぐらいで辞められて、たまるもんか」

両手で、ぎゅううううつ、と。

「逆に言えばそんな霞んだ視界であれだけのプレーができてたんだもの、眼さえよくなればほとんど無敵じゃないですか！ ね、そうでしょう？」

笑う。微笑む。

「でも」

「ええい、じゃコンタクト、買いに行きましょう！ いまから！」

「え、ええつ」

尻込むわたしを、言葉と腕で、引つ張り起こす。

「あつ、でもあれって眼科の処方箋要るんだっけ。保険証が……」

「ほ、保険証なら……ある、けど」

「さつすが姉さんだ！ 用意周到すぎる！」

「父が……いつなにかあるかわからないから、パスポートと健康保険は持ち歩け、って……」

「じゃあ何の問題も無し！ ね！ いきますよ、姉さん！」

「あつ」

ぎゅうつ、と掴む手に、抵抗できない。

するつもりも、なくなってた。

■ ガードグラス

——ショッピングモールに、コンタクトの量販店があった。空いてたし、流れ作業のようにてきぱきと物事が進む。眼の形良し病気無し、問題なく着けられるとわかって、処方される一日使い捨てタイプ。

眼を真正面に見据えたままの、メガネ無しの八尾先輩が現れる。なんとなく、夢遊病者みたい。眼をぱちぱちぱちぱちぱち……

「……コンタクトって、もつと違和感あるのかな、と思ってたけど、ほとんど、無いのね」

「ソフトの、特に使い捨てタイプはそうらしいですよ。こつとんが言っていました」

でも眼はぱちぱちぱちぱち……

「……変な感じですか？」

「う、うん、視界が違って、こう、下にフレームが無いから、なんか、足元が、歪まないのが逆に慣れなくて」

「支えます」

ギョッ。

手を握ってくれた。

恥ずかしい、と言おうとしたがでも実際、不安。甘えることにした。

用品一式を加えても三ヶ月分一万円に満たず、意外に安いな、助かったと思ったら、

「領収書ください」

「えっ、まさか経費で？」

「あつたりまえじゃないですか、戦力アップのためですから！」

「で、でも一万円って、大きいわよ？」

「大丈夫です。そのへんは三十六から『チームのためならナンボでも』と」

「空堀君どうやって稼いできてるんだろう……」

「男芸者とか言っていましたけど。こればかりはアイツに全部おまかせです」

「……頼りになるね」

「ええ。もうひとつ、行きますよ」

「えっ」

——手を、文字通り引つ張られて行つた先は、みんなもよく行く大型スポーツ用品店『スポルティーバ』。の、サングラス・コーナー。

「……このへんが、ポリカ製なので、ガードグラスに使えるかな」

「ガードグラス？」

「コンタクトって埃とか入るとめちゃうくちや痛いらしいんです。だからそのガードを」

「はあ……」

自転車、スキー、ゴルフ、野球、陸上……華やかな色とデザインの

グラスが並ぶ。ひとつ、掛けてみるとなるほど、天井の明るい蛍光灯を見ても、ぜんぜん眩しくない。

それより新鮮だったのは、鏡に写る自分だった。まるで別人みたい。

「それを思いついたのはですねー……」

上町君が、手元のスマートフォンを弄る。

「あ、こつとんと同じ」

「ええ。僕こういうのあんまり興味無かつたんですけど、三十六が持て持てつてうるさくて。でも持ってみるといろんなアプリがあつて、すごく便利です」

「アプリ？」

「FIFA公式アプリとか。国際Aマッチの詳細情報が見られたり。あとプレミア、リーグ、セリエ、ブンデス、もちろんJにもそれぞれアプリあつて、結果や寸評がリアルタイムみたいにわかつて……もうこれ無しでは生きていけません」

こぼれるような笑顔で、まるでオモチャを大切にする五歳児だった。ホントにサッカーが好きで……

……可愛い、な。

「……あ、これ。この写真」

「ん？ ……あ」

そこに居たのは、派手なガードグラスを掛けた、黒人系のサッカー選手だった。逞しい肉体に後ろでくくった髪。オレンジの眩しいユニ

はオランダ代表か。

「エドガー・ダーヴィッツ選手です。98フランスでベストチームと呼ばれたオランダ代表の心臓ですよ。彼はあだ名が『闘犬』って言うほどのファイターで。中盤底を駆けまわり、ボールを奪うやゴールへ突進。ダイナモ（発電機）そのものですよ。今度ぜひビデオ見てください。これぞ守備的MF、いや、ミッドフィルダーの一つの理想型です」

そして98フランス時の背番号もユミと同じ、16。

「……あ、これだ。このモデルそのものじゃないかな」

「あ」

フレーム黒、レンズオレンジ。目の周り全体を覆うド派手なデザイン。ツルの畳めない構造、レンズとフレームに隙間があつて蒸れない。それは……

「……よし！ これで！」

「……」

似合ってた。出した額、キリツとした眉と、レンズから透ける強めの眼が、自分でもびっくりするぐらいフィットしてた。

「いやこれダーヴィッツさんの写真見てるから、いいように思えちゃうんじゃないかな……」

「だったらミラクルズのダーヴィッツになってください……とか姉さ

んにいうのはアレかな、ちよつとヒールっぽい選手ですからね」
「……うん」

優等生。真面目。キツチリしてる。ミスしない。段取りがいい。間違いが、無い。

そういう、自分と周りの思い込みこそが、たいせつなことを、見失わせたんじゃないか。物凄く基本的な、大事なことを。

ゼロから、ぜんぶ、やり直そう。

「……ヒール、いいじゃない。キャプテンやエレーナと違うキャラ持つてなきゃ、コーチ、使ってくれないでしょ？」

ニヤツ、と笑ってみた。

眼が見られにくいと思うと、人は結構、大胆になれる。ミュージシヤンがサングラスを掛けたがる理由が、すこしわかった。

「おおつ。雰囲気、出てきましたよ！」

外して、見てみた。何度見てもド派手だが、だからこそ、変身アイテム。

変わるかも……いえ、変わらなきゃ！

「上町君、これにするわ」

「じゃあ、これも経費で」

掛けてみた。

「……バカね、こういう時は『僕がプレゼントします』って言うのよ」

「あつ、はい！ プレゼントします！」

「ふふふ……で、あとでこっそり経費で落とす」

「そんなことしませんよ。心のこもったプレゼントなのに」

「じゃあ、お返しは、なにがいい？」

ほんのり色っぽい答えを期待した私こそ、バカでした。

「んー……運動量」

隙を見せれば斬り込まれ、逆襲するといなされる。

なかなかこの人からは、ボールを奪えない。

……そして、レジ。

「「……二万三千円!?」」

顔を見合わせた。

「「……領収書、おねがいします」」

笑った。

——眼鏡を受け取りに行つて、慌ててその場でコンタクトを外した。違和感無い、と思つてたけど、外すとすぐスッキリした。やっぱりなんでも慣れるには、時間が掛かる。

「……うん、バッチリ。あ、これ端っこ全然歪まないのね」

「ええ。いいレンズですからね」

さっきのコンタクトみたい。

「じゃあ、また、支えましょうか」
「……うん」

出された手に手を載せると、顔に火が点く。

いやほんとに！ほんとに不安で！

来る時も帰る時もこれだと……ああ……店員さんに間違いなく誤解
定着。

……いや……別にかまわないんだけど……いや……

「なにか不具合ありましたら遠慮無くいつでもお越しく下さい。また
よろしくおねがいします」

ぺこり。ぺこり。ごつつん。

「「あいた」」

振り向きざま、繋いだ手を挟んで同時に会釈をすると、そうだった。
店員さんは、笑っていた。

——外に出ると、もう夕暮れ。

「……上町君、お夕食はどうするの？」

「あ、僕は……特に決めてません。とりあえず冷凍してあるのをチンかな」

「冷凍食品？ ばっかりだと、栄養、偏るわよ」

「あ、ではなくて、美緒が作ってくれたカレーやシチュ」

「きょうはおいしいものたべにいきましょう!!」

またミオだ。あなたミオミオ教の教祖様か。

「あ、はい、それもいいですね。」

「ははっ、実はひとりメシ、わりと苦手で」

「ああ……そうだよ、独り、だもんね」

上町君は確か、お父さんと弟さんがヨーロッパへ行つて……お母さんは、もう亡くなった、とか。

「むしろ牛丼屋さんやファーストフードで独りで食べるほうがマシなんです。まわりにそんな人多くて。家で独り、が一番味気ないですね」

「なんとなく、わかる。」

「どこ行く？ あ、『タベルナ・風花』にしましょうか」

「あ、張り込みますね。経費では落ちないですよ」

「作戦会議の軽食代つてことで、ダメ？」

「あはは、姉さん、すっかりヒールだ」

手をつないで歩く、小さな姉と大きな弟。

いつまでも歩いていたかったけど、その小さな木の扉にすぐ辿り着く。おなじみ赤白緑の三色旗が飾られた、ちいさなカジュアル・イタリアン。

「……こんばんわー」

「よおいらっしやいコーチ！ おお、珍しい組み合わせ！」

「こんばんわー」

珍しい組み合わせ？ じゃ珍しくない組み合わせがあるの？ でも聞いてまた同じ女性名が出てくるのやなので、聞かない。

イタリア修業中カルチョの魅力に憑かれたシェフ、三十六の口車に乗せられていまじゃすっかり熱烈・ミラクル・サポーター。もちろん大地や由美子はよく知ってる。

「選ぶ？ まかせてもらえるかい？」

「あ、じゃあ一人千五百円で」

「二千円！」

「お、ユミ姉ちゃん奮発するね。よおしまかせとけ、世界中どこ探したって出てこない二千円ディナーにするさ」

「姉さん、二千は出しすぎだつて」

「たまにはいいじゃない、お腹いっぱい、おいしい物で」

「いや、えー……まいいか」

「♪オオ、ソレ、ミミミオミミミ」

……なぜまたその名が……

で、えらいことになる。

アンティパストの五種盛り、トマトの酸味豊かな具沢山の野菜スープにボンゴレとタマネギのバルサミコサラダ、チヨリソがピリリくるピッツア三〇センチ、パスタはジェノベーゼとゴルゴンゾーラのフェットチーネ、ハマチの優しいグリルに、ペッパの効いたカリカリのリブステーキ、パプリカとチキンのほろける煮物。もちろんバゲット・フリーで、ワインの代わりだとべらぼうに美味しい葡萄ジュースがデキャンタで、ドン。二〇〇%足出てるご馳走ラッシュに、食いしん坊の二人でも、結構パンパン。

「……千五百にすべきでした……」

「ね？」

「……おふたりさん、足りてる？ 足りない？ リゾット炊いてこようか？」

「「いえ、もうじゅうぶんです！」」

「シェフこれ、絶対赤でしょ？ そんな、気を遣ってもらわなくても」

「なぐにを言うやらアツレナトーレ（監督）！ 僕にとつちや大ちゃんマルチェロ・リッピやジヨバンニ・トラパットーニと同レベルの英雄だっつーの」

「いやあ……」

「CLの優勝会見で若い頃行った店の名前、出して欲しいなあ」

「はい、優勝したら必ず」

「ぶふっ」

イタリアのヴィーノが未だに血管を流れてるシェフの劇的な表現に、ユミは思わず笑った。

「じゃデザートだね！ なにする？」

「僕はもうカプチーノで。もう無理です。姉さんは？」

「……ていれみす……」

「あいよ！ わははは、大ちゃん女の子に負けてちゃダメだぜ」

「選手より喰うコーチもみつともないですよ！」

「わはは」

すぐにいい香りと、見目も麗しいカカオの輝きがやってくる。

「……今日はなに、デート？」

「まさか。お姉ちゃんの買い物荷物持ちです」

……こここそ誤解させても、いいのよ？

「あはは。その割には荷物無いけど、何買ったの？」

「メガネです、メガネ」

「ちよんちよん、と指した。」

「なーるほどね。目悪いと似合ってるかどうかも自分じゃわかんないよね。やっぱりね、『信頼できる人』に見てもらわないとねえ……なーるほど……」

「な、なんですか、シェフ」

「……ま、しかしこうして見るとホントに姉と弟って感じだね」

「そ、そうですか？」

「ああ。ボケーとしたボンクラ弟と、世話焼かざるを得ない優等生の姉って感じ」

「ボンクラはひどいですよ」。

あ、でもね、僕、長男なので、兄貴姉貴ちよつと憧れますね」

「へえ、そうなんだ。オレてつきり大ちゃんの下かと思ってたぜ」

「ええ、よく言われます。なぜか上受けがよくて。だから兄貴的な人はたくさんいましたけど、お姉ちゃんはいなくて……そうですね、ユミ姉さんが本当の姉さんなら、こんな素敵なことはないのに」

にこつ。

くらつ……

ああ……この子、私を殺す気ね。

きつと、すごく変な顔をしたんだろう。シェフが私を見て、

「おいおい大ちゃん、このシチュエーションで『姉さん』扱いはご不満のご様子だぜ」

「あつ、そうか、恋人ですね。

ユミ姉さんが恋人だったら、こんな素敵なことはないのに」
言っちゃう!?

そんなことさらつと言っちゃうの!?

「……ね、姉さん？」

……私にどうしろと。

「恋人に姉さんって語りかける馬鹿がいるか。」

ほれ、呆れてユミちゃん固まってるじゃねーか」

「あは、ほんとだ。修業します」

「そうだ。『口説けるものは姉でも口説く』。これがイタリア男の真骨頂」

「嘘だあ」

「わはははは……ま、ゆつくりしてつて」。

♪あーいつはあいつはかわいいい〜

年下の男の子〜〜」

なんか聞いたことあるようなないような懐メロを歌いながら、シェフは厨房に消えた。

ちよつと！ その歌詞！

「……ところでユミ姉さん、きつき珈琲のところで聞きかけたこと、なんです？」

「あ」

自分が忘れてた。半ば解決したようなもんだけど……と、少し考えて、言い方を、変えてみた。

「……私ね。

コーチを世界一のコーチと見込んでの相談なんだけど」

「わはは」

ちよつと気分が高揚してるのか、そんなお上手も口をつく。

「……美緒ちゃんに、勝ちたいのよ。」

「……サッカー選手として」

なんだその微妙な間は！ 自分！

「あー……方法、無くはないですよ」

「ホント!？」

一瞬間をしかめたコーチは、でも次の瞬間にはニツ、と笑った。

「要は美緒にない武器があればいいわけです。他何も持つてなくても、それがあれば状況によつては使いたくなる」

「それは」

「……ちよつと抽象的になりますが、いわば……」

状況を、変えていこうとする、力いや意思。

積極性つてまるめちゃうとちよつとズレるかもしれないんですが……

……

「あー……なんとなく、わかる」

思い当たる。私がベンチで見ててうつすら感じてた違和感が、うまく表現されていた。

コーチは自分のイメージを補強するように、言葉を巡らせる。

「美緒はよほどのことがない限り受け身なんです。だから状況に対応してる限り完璧……ちよつと僕でも見たことないほど完璧な選手なんですけど、その状況自体を変える意思は少ないんです。いや、だからこそ状況に完璧に対応できてるのかもしれない。けど」

「交代選手は、そこをやらなきゃ」

「そうそう、そうです！」

そこで、ファイター・ユミ姉の定番です！」

その笑顔に、ふつ、ふつと体の奥に湧いてくるものを感じた。それなら……

「それなら、まかせて！」

「ははっ、頼りにしてます！」

「……あ、でもはなちゃんなんかも、意思強いよね」

「ええ。でもハナは厳しすぎて。みんなテンパってる時にギャーギャー言われてもなかなか耳に入らないんですよ。その点、姉さんは背中引張つてく方だから、みんなついていきやすいかな」

「そうかな……自分では、あんまり意識ないけど」

誉められて、テレル。

「古都がユミ姉さんはもう進路とか将来とかガッチリあつて、凄い、尊敬する、つて言っていましたよ。僕もそう思います」

「いえいえ、まだ、なつてもいないから」

「なんか原始人と一緒に未開の地を探検する冒険家でしたっけ？ すごいですねえ」

「いや。」

どこをどうしたらそんな伝言ゲームに。

「……ついだから変なこと聞くけど、上町君なら、私、なにが合つてると思う？ 職業」

「え？ 職業？ 仕事……ですか？」

「うん」

「ユミ姉さんか……うーん……」

少し考えて出た彼の答えは、意外だった。

「国連の人？ あの、日本人のおばさんで、難民のことやってたエライ人が居たでしょう」

「緒方貞子さんね。国連難民高等弁務官」

「あ、たぶんその人です。」

……僕ちよつと昔、アフリカとかに行つた経験があつて「へー」

彼は少し、手元のデミタスカップを見つめた。珍しい表情を見せてくれたことで、距離が近くなつた気がする。

「その時いろいろ見て思つたのが……やつぱり僕ら恵まれすぎて……遊びみたいなことで世界中旅させてもらつて、別にそんなこと感じる必要ないんでしょうけど、なんかちよつと罪悪感あつて」

「わかる。私も、父と一緒に旅した時、ちよつぱり思つた」

「あ、お父さんが凄い人らしいですね」

「いいえ。でも、うん、そうよね」

「だから、ああいう人が活躍していると、代わりしてくれてるような気がして、ちよつとホツとしますね」

「そつか……」

あんな偉人にはなれそうもないが、でも、紛争地域で奮闘する国連

職員やNGOにも日本人は居る。NHKの番組で、武装解除に我が身の危険を省みず駆けまわるガッツ溢れる女性を見た。マラリアの予防接種と、水の殺菌剤をいつも持ち歩いていた。

バイタリティなら父譲りだと思つていたが、私には父のあの、誰とも友だちになれる人懐っこさは無い。なら……

ボンヤリしていた未来予想図が突然描き変わつて、しかもやたら鮮明に見える。

一時の興奮じゃない？

でも、いえ、でも……

「姉さんは頭もいいし真面目だし頼れるしガッツあるし、さつき言いましたけど、きつと誰にとつても理想のお姉ちゃんですよ」

またそんな風に人の心の火種をどんどん煽る。

なにこの子。天才？ 天災？

「わかりました。そちら方向も考えておきます。でも、危険な仕事だね。大切なお姉ちゃんを危ない目に遭わせるつもり？」

「危険な方が燃えるじゃないですか、我らがユミ姉は」

「ふふ……つまりここ、奢ればいいの？」

「だからそれは、運動量で」

「ふふふ」

「蘭なんか、紛争や動乱のニュース見たら銃持つて戦いたいっていうんですよ、あいっ」

「ええーっ？ ほんと？」

「子供やお年寄、弱い人を守るために。あいつ根っから言葉通りのデ

イフエンダーなんですよ」

「はー」

「それを、ユミ姉さんがあっち行けこっち行けと指示を出すわけです。蘭、燃えたとわけわかんなくりますから」

「あははっ……」

—— 楽しければ楽しいほど、時は一瞬で過ぎる。

帰りも駅まで、手を引いてくれた。

何も言わずともお店を出ると、スツと握ってくれた。上町君は、ボケてるようで、そういうところは、絶対に外さない。

おなかとむねとあたまがいっぱいで、なんだか星空を飛んでるみたいだった。

スーパーマンが素手なのは、あのシーンのためじゃないかな……とか、浮ついたことを、考えていた。

■変わりゆく変わらない日々

——夜部屋で、身体中にいっぱいいろいろなものが詰まって、身動きもできない。

椅子の背にだらんとたれ、天井を見上げて、帰ってからずっと弄んでる例のガードグラスを、かざしてみる。
オレンジに変わる視界。

掛けてみる。

いつもの部屋なのに、まるで知らない世界になる。気持ちもふわふわした、自分じゃないような感じ。

まるで、変身したみたい。

『……人間の感覚って、不思議だな』

さつきちよつと言われただけで、いろいろ進路を妄想して、止まらなかったりもする。もう何年も、きつとこうするんだろ？な、って思ってたことが一瞬で崩れ去って、新しい価値観が構築されていく。
きつと……話に聞く「恋」って奴は、こんな感じなのだろう。

噂をすればなんとやら、ノートPCが着信音を立てた。IPビデオフォン、父からだ。

「とおさん元気!？」

『……おーユミコ、げ、なんだそりや』

「あ、ごめんごめん。サッカーのサングラスなの」

『ああ、なんだびっくりしたぞ。けど意外に悪役っぽい、似合うな』

「あなたの娘だから」

『わっはっは』

日常の細々を報告しあって、

「……じゃ、かあさんに代わるね」

『ん』

「あ、そうだその前におさん、私、とおさんの研究室、行かないかもしれない」

『ん？ そりや別に構わんが、なんだ、やりたい研究でも見つけたか？』

「うーん……また帰ったらゆっくり相談に乗って？」

『ああもちろん。文化人類学なんてヤクザな商売だからな、やらん方がいい』

「もつとヤクザな仕事かも」

『おいおいおい、さつきのグラサンといい、なんだ、遅く来た反抗期か』

「そうかも。バイクはまだ盗んでないけど」

『わっはっは。♪I LOVE YOU』

母と弟の居る居間にノートを持っていった。また弟がその土地の珍しい土産をねだっている。この子のほうが、父の跡を襲うには向いてるんじゃないか。

部屋に戻る。

父の顔見てさらに気分が高ぶっちゃって、なんだか何も手につかない。こういう時には……

クローゼットからユニを引っ張り出した。ピンク・白・白のおなじみミラクルズ・スタイル背番号もちろん16。慣れぬ手つきでこわこわコンタクトも入れる。そして……

チャッ。

掛ける真新しき変身グッズ、ガードグラス。

髪飾りを解いた。本物の前に置く。危険防止のため、ユニに着替えるとゴム輪に換える。そのたびに「お守り」を手放すような気がしてほんの少し心細かったが、いまなら大丈夫。

なんたつて目の前に、新しい「ガード」があるから。

たたた、と廊下を駆けて洗面台で見る、自分。

……いけてるじゃないーい！

小柄がむしろ「闘犬」そのもの。自分で言うのもアレだけど……キヤラ立ってる！

よううし……

一発、ブチかましてやろーじゃないの！

「……ゆみー、パソコン返すわねー。

あれ？ なにそれ？ これから練習？」

「えっ、いや、え、えーつと、あ、うん、その、ちょっと」

「ほどほどにしないよ夜遅いんだから。」

わ。なにそのごつついサングラス」

「う、うん、目を保護する……の」

「うわー……ウルトラマンみたい」

「……」

おかあさん……
気分が……

「ケンジー！ お姉ちゃんウルトラマンみたいよー！」

「呼ばなくていいから！」

その後小一時間、ユミは半ベソをかきながら、家の周りをジョグした。

でも、遠足用を買ってもらった新しいリュックを背負って歩いているみたいで、楽しかった。

ゆ

「……はへ？ ユーミどうしたの机突っ伏して」

翌日昼、忍に心配そうに覗き込まれる。

「ちょっと、むねとおなかがいっぱいのの。」

……昨日いろいろ、詰め込み過ぎて」

「珍しいね。その節制と規則正しきで『シスター』とあだ名をとる貴女が」

「いつそんな風に呼ばれたのよ」

「姉さん姉さん呼ばれてるじゃん」

「……忍、たまにうまいね」

「い・つ・も〜♪」

あれ、メガネ替えた？」

「……ん。ちよつと古くなつてたから」

「いいね。よく似合ってる」

「ありがと」

「あでもメガネ買いに行くなら誘つて欲しかったかも」

「あれ？ しのは目、すうごくいいでしょ？ アフリカ人ぐらい」

「誰がサバンナ育ちじゃ。私、眩しいの弱いよ。ほらこんな目ですよ？」

忍の目は、日本人には珍しいヘーゼルと言つていいほど薄い茶で、光の当たり方では薄い赤にさえ見える。

「試合はともかく練習の時サングラス欲しいかな、と思つててー」

「じゃ今度つきあう。『スポルティーバ』のサングラス売り場、すごく充実してたから」

「ん？ サングラスも買いに行つたの？ ……あれ、なにそれアヤシイなー。デート？ デートかこの！ オトコかー!? あたしたちの知らない間に彼氏デキたのかカラーーーー！」

「うん。上町大地とね！」

ガラリ、と忍、武人モード。

「……由美子殿、先ほどから様子がおかしいぞ。なにか悪い物でも食べたか」

「……」

「由美子殿がすっかりしてくれなければ、我がチームのベンチワーク

はどうなるのだ。一七人揃つて初めて、我らがミラクルズだぞ」

「……」

えー……私と上町君つてそんなに……

えー……

「保健室へ行こう！」

「大丈夫です！」

……失礼な……

㍻

五時限目の休み時間に、胡桃が来た。手にノートを持つてる。

「……ユミ。これ、なんて読むの」

Yummy。

「『ヤミー』。『美味しい』の子供っぽい言葉ね。『おいちー！』とかそんな感じかなあ。『ウマウマ』とか言うじゃない、千里とか。あんな感じ」

「ふむ。……ママが持ってきた虫に対して子供たちが言うセリフなんだけど」

「えっ？ じゃ私の記憶違いかな……ちよつと辞書引く、というか、辞書に載ってない？」

「あんな重い物持ち歩く筋肉趣味じゃない」

「電子辞書とか」

「電気嫌い」

「ケータイの」

みかんの皮を目の前で絞られたような顔をするネコ。

「目、悪くなるからできるだけ画面見たくない。字ちいさいし。眩しいし。おかしい。まちがってる。なにもかも」

「ま、それもひとつの見識ね……あつた、うん、この発音記号だと『ヤミー』でいい、はず」

「ユミーだつて紙ー」

「あー、私は前後の単語チラチラ見たいのと、手で引いた方が覚えるかな、つて……て、その場面がおかしいわね」

「鳥の親子なんだけど」

「じゃ『美味しそう』でいいじゃない!」

「これ、『ユミー』だよね、どう見ても」

「まあ発音と表記が無茶苦茶なのが英語の難しいところで」

「『ユミー』で『怖い』つて意味かな、つて」

「どーゆー意味。

その鳥の親子が私のことを知つてとは思えないわ。

もちろん私は怖くもなんともないんだけど」

「これは、『ユミー』」

「だからー」

好きでないカリカリが盛られた皿を見るようにじつとノートを見ていた胡桃だが、

「もういい」

「怒らなくてもいいじゃない」

「怒ってない。ガッカリしただけ」

「なにをガッカリするの」

「虫がユミーで無いことに」

「……」

「ユミーも美味しくなかったことをガッカリして」

胡桃ワールド今日も絶好調だ。

「いや、美味しいがヤミーであることと私が美味しいか美味しくないかは関係のないことで、て、美味しいって、なに？」

「ももあたりがよく知ってる」

「あの人の顔ペロペロするの良くない癖だよ」

「私なんか髪はむはむされる」

「ああ……さらさらへアーだしね、くー」

「アフロにするか……」

「鳥が巢にするわよ」

「ユミー・ユミー・ママー・ユミー……」

鳥の子供たちになつていた胡桃が突然ポン。とグーとパーを打ち合わせた。ユミの鼻先を人差し指で指し指しして、

「ヤオユミコ、でヤミー」

「はい？」

「きょうから」

「いや、ニックネームは自分で決めるものじゃないから」

「私、決めたよ自分で」

「へーっ、そうだったんだ」

そういえば、「『くー』で」と本人が言ったような覚えもある。

「……バスケット部に入った時に」

「中学で？」

「そう。ユウコが『くる！　くる！』って指示出すの」

「ああ、バスケットも『くるみ』って言うてられないわよね」

「いつ『パー！』って言われるか怖くて怖くて、ある日『くー』にして、って」

「ふふっ」

胡桃らしいエピソードだ。

「……でも『ヤミー』はワルモノっぽいね。闇の一族。魔法少女で」

「悪の女幹部？」

「の、飼ってる変なペット。たまにこつち来てヒロインの妖精と喧嘩する」

「グレードダウンしたわ……」

「？」

「なんでもない」

「やめとく？」

「ふふ、そうね。魔法少女パステライズド・ユミで」

「……」

くしゃみ寸前のような顔をして、そのまま去る猫。何が言いたいのかが何がしたいのかさっぱりわからない、もちろん本人もわかってないのが猫の魅力だ。

ふと、手元辞書のその単語を見た。

Yummy。ユミー。美味しい。ワルモノ。

……思いついた。

そうね、アレも掛けることだし。

イメチェンは、一気にやった方がいいでしょう。

『……空堀君に相談しよう』

お金使い過ぎ、って怒られるかな、ふふっ。

㍻

——練習中。今日のユミ姉さんは、こころなしか目をパッチリ開け気味だ。大地、声を掛けてみた。

「……ユミ姉さん」

目を人差し指で指して、

（コンタクトですか？）

ユミ姉、コクコク、指でOKサイン、

（パッチリ。）

大地、右手人差し指と親指でコの字を作って目に当てて、

（グラスは？）

ユミ、人差し指を唇に当てて、

（……ないしょ）

大地ニッコリ笑って、

(なーるほど)

微笑返し、たたつ、と駆けてメニューに戻るユミ。

もちろん、目ざとい古都に見つかる。

「……なんです、今のサイン？」

「ないしょ」

「あやしい……」

「あ、古都、手が空いたら部室行つて、とある選手のプレー総集編みたいなの作つて欲しいんだけど」

「あ、はい！ どなたでしょう！」

「エドガー・ダーヴィッツ。オランダ代表」

「はい！」

「素材は94―5シーズンのアヤックス、97のユヴェントス、98フランスとユーロ2000のオランダ代表、04シーズン後半のバルセロナあたりから」

「ちよつ、ちよつと待つてくささいメモります。……これ全部、覚えてらつしやるんです？」

「ん？ ああ、名選手だし」

「すごいですう」

「いやー、将棋の棋士さんなんか戦つた棋譜全部覚えてるらしいからね。まだまだ」

「まさかでも、プレー全部を覚えるわけには……」

「自分の指揮した試合なら、だいたい覚えてるんだけどね。やつぱりビデオだと肌感覚がないからか、覚ええないねえ」

「……」

マジですか。

横でコーチ見てて、小学生チームのコーチングぐらいなら自分にもできるかも……とか思つたことあるんだけど……とんでもない。いや、とんでもないのはこの人なのかもしれないけど。

「……い、行つて参ります！」

「はいよろしく。で、出来あがつたらユ、……いや、僕に持つてきて」

「ゆ？」

「……ないしょ」

「……あやしい……」

まあそのうちわかるつしよ。

ネタバレは、無しのほうが楽しい。

——部室でビデオやDVDの原盤をとりあえずひと通り引つ張り出してみて……

「……多っ!!」

『いきなり重いものをドンと載せる』。やつぱりあの二人は似たもの夫婦なんじゃないかなあ……

もちろんそんなことを口に出して言う調子に乗る特に片方が、なので、絶対言わないけど!!!

■ 負けるには

——翌日曜日。練習試合。

本日は珍しく、相手高校のグラウンドにお呼ばれである。立派な正門で守衛さんに来意を告げ、グラウンドに向かう。

「……久しぶりだね、サポ無しは」

「イザとなると寂しいね」

いつも応援に駆けつけてくれる、サポ大将・千林哲哉率いる校内サポ、『風花』のシェフのような街の人も居ない。ということでは今日は空堀アシスタントも欠席だ。

なんだか実に、頼りない。

「本物のアウエーはこんなもんじゃ無いですよ」

「せやな、こんな無観客試合みたいなもんスよ。この程度で心細うなとつたらあかん」

可憐、ナナ、ユース代表二人が苦笑い。

「……それにしてもええとこでやってんなあ……」

「そうですね……」

校舎も近未来的な私立高校は郊外にあり、グラウンドは手入れの行き届いた芝で、男子ラグビー用のポストまである。地図を見ればテニ

スコートなど一〇面もあり、本格的にスポーツに力を入れているのが見て取れる。

本日の相手のエースは野田圭、ユース代表候補にもしょっちゅう名前の上がる本格派のFWだ。

「……のんちゃん、国見キャプテンとキャラ被るんで不遇かこってんねんけど、能力は十分ユース級や。カウンター一発で持っていかれるから、気合いれていかなあかんで！」

「おうさ」「うん!」「はいっ」

——着替えて、準備。大地、相手チームの監督と試合の細則を確認して、さて、試合前ミーティング。

指揮官・上町大地、相手校内で試合、が決まってからひとつ、試してみたいことがあった。

それは、「負ける」こと。

サッカーは、いやどんなスポーツでもそうだが、勝敗は時の運である。スペイン代表だってバルセロナだって、負ける時は負ける。ただその数と割合が少ないだけだ。

しかし、敗北から得られる教訓は多い。上手く行ってる時には「まあまあ」と目をつぶっていた欠点や弱点が明らかになる。そこを潰すなり誤魔化すなり、長所でカバーするなりして、チームは成長していく。

ところが、ノックアウト・トーナメントが続く「クイーンズカップ」予選そして本戦では、一発負ければ終わりでありつまり……そんな機会は、今しかない。

先日の古都の問いに答えた大地の「ぜんぶ」は、あながち誇張でもない。「気になる点」を挙げればキリがなかった。

特に気になるのが、チームの仲がいいのは凄くいいことなのだが、その裏返しで「誰かがなんとかしてくれるだろう」という空気がある。これは、断ち切りたい。団結心と依存心は別物である。

「……本日先発、G K、千里」

「はっ、はい！」

「D F右から、明日葉、蘭、もも、はなこ」

「イーッ!？」

レギュラー左サイドバック・流乃が素っ頓狂な声を挙げた。構わず続ける。

「M Fボックス、右オフェンス・マキ、右ボランチ・ナナ、左ボランチ・エレナ、左オフェンス・ありす」

「ボランチかいな……」

運動量を要求されるボランチ、セントラルハーフは、ナナは正直、好きではない。

「F W、横並びで右に胡桃、左に愛。本日は」

エースも無し、キャプテンも無し。目をぱちくりさせてるメンバーに余計な疑問が浮かばないうちに、

「緊急事態です。」

可憐が累積警告、流乃はバイク事故、忍はお父様とTV出演、キャプテンは食あたりで出場できません。

これで、勝ちましょう」

「「……はいっ!!」」

ちよつとコミカルな状況設定に、空気が緩んだ。

それならば、そう戦おう。

外された四人も、つまり重要視されてるわけだから、嫌な気はしない。

「ナナ、ゲームキャプテン」

「へいへい。……ウチもサボつたらあかん？ 代わりにユミ姉で」

「君までいないとさすがにどうにもならない、ので」

「……せやねえ。ま、ビンボクジ引きまっさ」

ナナの左腕に、キャプテンマークを、古都が巻いてあげる。

「相手は11番（野田圭） 目指して蹴ってくる、ロングボール&カウンター戦法だと思う。ただ、こういうチームはそれをしつっこくやってるので、侮つては絶対にいけない。いいな」

「「はいっ!!」」

「ほな行くでえ〜〜〜……」

DOI」

「「Miracles!!」」

先発一人が、ピッチに散った。

「……あとアウエーだからレフェリングについての注意は？」

「それも試練」

なるほどね、とうなずく今日はキャプテンではない美緒。ベンチに向かうと、ユミ姉さんが、既に落ち着き払った表情で、座っている。

「……姉さん残念でしたね」

「ううん。いつものことだから。」

途中からも、おもしろいよ」

「……」

そうか。ヘラヘラしてる場合じゃない、コーチはきつと、私たち四人の振る舞いも見てる。

私たちだって途中から出る可能性はあつて、その時ゲームに入れません、入るのに時間がかかります、では。

「……ちよつと動いとうか、流乃」

「ん」

「まだいいわよ。さすがに頭一五分ぐらいは」

と、やんわりたしなめられたりも。

うーん。いつにもまして落ち着いてる。まるでキャプテンではないか。

その横に腰掛ける。と、姉さんは見慣れぬ黒いポーチを、膝に抱いている。替えスパイクにしては小さいし、お弁当でもあるまい。

「……なんです、それ？」

「……ひみちゅ」

ドキッとしたので、噛んだ。

ぷつ、と美緒嘔き出して、放置。

だって秘密って、言われたら、ねえ。

(……ここで何も言わないのが美緒ちゃんの……えー……タヌキ)

試合が、はじまった。

ss

「……意外に強い、ですね」

「やるね」

古都の問いかけに素っ気なく応える大地。想定内だった。

ワントップ野田選手はやはり頭抜けた存在で、スピードと高さ、それに身体のキレや当たりの強さも相当いい。ミラクルズに欲しいぐらいだ。

その周りを、小柄な10番の選手がチョコチョコ動く。足元が巧い。攻めはこの二人にまかせて、あと八人は四人・四人の二段ブロックでベッタ守り。

お馴染みのカウンター・スタイル。

が、この八人のフィジカルがかなり鍛え上げられていて、一対一だと五分五分に持ち込まれる。ボールの奪い合い、潰し合いが続く。

前半一五分経過、両者無得点。

ベンチももう、真剣に見入っている。

「……はな、サポート行つたげないと」

攻撃のありすが、左サイド高い位置で孤立する。相手はサイドハーフ・サイドバック二人で挟みこむ。サイドバックが支援に行かないと、一対一ではなかなか厳しい。

流乃のつぶやきに、

「愛先輩でもエレでもいいんですけどね。距離感が悪いですね」

可憐も応えた。愛はゴール方向ばかり気にし、エレはなにを怖がっているのか、中央付近のポジションを守りたがる。

「右も同じだね。ナナと違ってマキちゃんだと突破一本だから抑えこみやすい」

右サイドでもマキへのフォローが足らず、悪い癖の持ち過ぎが出ていた。持ってはコネて、奪われる。

肝心のナナが、バランスを取ることに腐心して活き活きと動いてない。長いボールで周囲を使おうとするのだが、それらは届く前に人手

人壁に跳ね返される。

陣形を崩さず慎重に守る敵陣。

陣形を固められ自由に動けない自陣。

がつぷり四つに見えて、内実これ押されてるんじゃないの？

三〇分を過ぎると、さすがにイライラしてきた。流乃は目を細め頬杖を突き、可憐は小刻みに貧乏揺すりをし、忍はまるでゴールを守るように立ったまま。美緒も腕組みして小首を傾げっぱなしだ。

『……こんなに弱いのか、私たちは』

冷水を浴びせられたような気分だった。いかにレギュラーを四枚落としてるとはいえ、ナナもいるし、コンディションもいいし、相手はそう強くない。

なのにこんなに、なにもできないのか。

知らない間に、「去年（本戦に）出たじゃん」という甘い考えに蝕まれていた。そこに可憐のような強力な武器が加わり、頼れる上町コーチが君臨したのだ、もうそんな、予選なんて寝てても突破できる……それが、このザマ。

しかも徐々に相手が調子を上げてきている。「抑えられる」という自信が湧いてくると、攻撃にも勇気を持てるようになる。

前半四〇分過ぎ。

いつもは中央に陣取ってた11番野田選手、右に（ミラクルズの左に）大きく開いて構えた。

はなこがススッ、とチェックに寄ったところを……

「ダメッ！」

思わず流乃が叫んだ。

見計らったように、後方からロング・パスが飛んだ。

その瞬間、身体を入れ替わられ、かわされるはなこ。

「オフサイド！」

F W本戦・可憐が叫んだ。しかし副審は相手側の人間、旗は上がらない。たぶん、ビデオで見返せば微妙だったろう。

そのまま11番が独走する。

その後がまたよくない。慌てた千里が飛び出して……

「……いかん!!」

今度は忍。

距離がありすぎる、不要に前に出ては……

くいっ。

トップスピードから腰を捻ってインサイドで引つ掛けるようにボールを浮かせる。その瞬間さすが千里、蛙のごとく跳び上がるがもちろん、届かない。

ループ・シュートが、無人のゴールに吸い込まれていった。

わーーーーー……

と上がる歓声、胸を叩いて零れんばかりの笑顔で「どうだ!」とチームメイトを鼓舞する野田圭、対するこちら、ナナは両膝にガックリ手を付いた。

『……ナナ、ここはあなたが顔をあげないと』

美緒は思った。と同時に、あれだけの実績を持ちながら「ウチはキヤプテンのガラやないから」と逃げ惑うナナの困り顔も思い出す。確かにこの、感情を思ったとおり出すのが、彼女のいいところで。

だがさすがに、今日のメンツだと自分が引つ張らないと、と思いついたらしく、両手を叩いて何度もガッツポーズを作って、周りを乗せ

ていく。蘭が応えて、大きな声を出す。自身、オフサイドだと思つて一瞬足が止まった。CBにあるまじき失態である。

「……コンビネーションが……よくないですね……」

古都が絞り出すように言つた。大地答えて、

「うん。文字通りコンビがいつもと違うからね。胡桃は可憐じゃなくて愛、ありすは流乃じゃなくてはな、エレーナはキャプテンじゃなくてナナ、明日葉はナナじゃなくてマキ……CBセットは同じだけど、後ろが忍じゃなくて千里だし」

「……でも、そんなこと言つてられませんよね」

「そう」

おたがいに縮こまりすぎて、1+1が2にもなつてない。1+1を3にも5にも10にもするのが、チームスポーツなのに。

——しかし、この一発で目が覚めるかと思いきや、逆にさらに縮こまつた。まず守備から、慎重に、という意識が働いて、横パス・バックパスばかりが増え、ボールがちつとも、前に進まない。

それならそれで、高い胡桃目がけてキック&ラッシュ、相手のお株を奪うロングボールでも試みればいいのに、そんな心の余裕もない。

「……コーチ！ 出して！ ケツ叩いてくる！」

流乃がついにキレた。大地無言。流乃もそれ以上は言わず、唇をキュッと噛んでピッチに目を戻す。

ピリピリしてくる雰囲気、古都はちよつとオロオロしながら、ふと、気づいた。

これも、コーチの作戦かも？

いつもなら順境でも逆境でもあそこで戦つてるだろう四人、こんな

真綿で首を絞められるようなやるせない気持ちにはならないだろう。試合に出たい、戦いたいという気持ち、爆発寸前に膨らんでる。可憐などもう貧乏揺すりも止まつて、ロダンの作品のように固まつたままだ。目が、怖い。

前半終了間際、また、11番に一本が通つた。

まっすぐに駆ける、今度は千里も飛び出さない、追走する蘭、追いついて、足を出す。こんがらがる、倒れる二人。ピーッ……主審が近寄つて、イエローカード。

「えー……っ!?!」

流乃と可憐が立ち上がつて叫んだ。それは……いくらアウェーといつても露骨すぎないか、どう見てもバッチリボールだったのに……しゅん、としよげる蘭の背中をどやしつけるナナ、落ち込んでる暇はない。FK（フリーキック）守備。ペナルティエリア左角あたり、近くて怖い。キッカーはもちろん11番。

千里が壁の指示、一枚、自分はニア（ボールに近い方）を締めて、ファー（遠い方）はみんなに任せる。

「……足りん。」

……チータ！ チイイイイタ！」

遅かった。

蹴り出されたボールが緩い弧を描いて、千里の目の前でショートバウンドした。イレギュラー気味に暴れるボールを、千里、抑えきれない。ファンブルして、そのまま、ゴールへ。

「「あああああああ……」」

溜息とガックリが、ベンチをそしてピッチを支配した。

「……忍様、壁の枚数ですか」

古都が聞く。

「そうだな、一枚では少し曲げればかわせる。11番は巧いので、それは考慮すべきだ」

「なんだろうとニア破られりやGKの責任ですよ。ちー、これがあるからなあ……」

可憐が顔をしかめた。千里は運動センス抜群で、そしてそういうタイプに往々にしてある癖で、「いけるいける」と自分の能力より守備範囲を甘めに見積もる。だから「当たって」いる時は目を疑う超人的プレーを出せるのだが、そうでなければこんな、信じられないポカをした。

——前半終了、一様にうなだれて戻ってくる一人。

に、ナナが激を飛ばす。タオルで汗をぬぐいながらペットボトルをがぶ呑みしながら、吼える。

「……よし！ 後半逆転するぞ！

愛！ くー！ 動いて！ とにかく動いて！ 両方真ん中張り付いててもしゃーないから！」

「はい」「ん」

「あー！ マキやん！ たまに！ たまにでええから、守備にも戻って！ あんたらMFやねんから、ボール奪いに走って！」

「はいっ！」 「ワカッタ！」

「エレ。ウチがバランス見るから。あんたはもうとにかく走り。細かいこと考えんでええから、ボール目がけて走り」

「ハイッ！」

「おはな、はっぱ、前のありすとマキとの間だけ、ここだけちょっつと意識して距離詰めて。さすがにずっと独りぼっちではなんもできんから」

「了解」「わかりました！」

「もーさんな、後ろチーやからて、あんまライン上げんでええで。オフ取り損ね怖いから、じっくり構えて」

「うん！」

「蘭、圭に勝ってる勝ってる。その調子で抑えて。アイツさえ抑えりや点は入らんで」

「……うん！」

「ちー」

「はいっ！」

ぽかーん！ いきなり、殴る。

「しつかりせんかーいおまー！！ 気合が足りん気合がー！」

「はーいっ！」

「まだ・足らーんーん！！」

「ハああああイッ！！」

涙目で叫ぶ。

「よっしやあああ！！」

その頭を、グシャグシャッと、両手で撫でてやる。鍋洗いのように。グローブで目元をゴシゴシ擦る千里。

「……取り返すぞ、2点いや、3点ッ！！」

「「おおっ！！」」

「……コーチ、なんかあります!？」

「バッチリ。さすがナナ」

まるで他人事のように、指で丸を作って出す。

カチン、と来た。

よおおしそこまで突き放すんなら、勝ったろやないの！ この一人でな!!

……まもなく、後半が始まった。ベンチの五人は、アピールも兼ねて身体を動かし続ける。

——だが後半も、駄目だった。

さすがに距離感が修正されたので多少ボールはつながるようにはなったが、今度は2点のリードを糧に、ただでさえ堅守の相手がさらにガツチリ隙を見せない。

選手達もなんとかしようと同半より厳しい表情を見せるが、うまく行かない。徐々に焦りと不安の色が、滲んでくる。

しかし、変な色が滲んできたのは、大地の心にも。

自分でやっておいて、だんだん、負けるのがイヤになってきた。

教育効果的にはもう十分じゃないか。先発の一人もベンチの五人も、試合前と顔つきがまるで違う。

なにより……つまらん。

では……勝つとするなら？

途端、パーツとさまざまなアイデアが頭に心に湧いてくる。そうスポーツは勝つためにやるものであり、勝ちたいからこそ、おもしろい。

……ポロツ……

エレと相手の中盤選手が空中戦で競ったボールが落ちた。そこへ、ナナ、はな、もも、ありす、それから敵選手も数人、のそのそと集まってくる。お正月のおしくら饅頭のような人団子ができて、さらにそこからポロリと出たボールを、俊敏で獰猛な野田選手が奪い、雄々しく駆け、蘭を振りほどき、千里目がけてシュートの牙を剥いた。

千里必死で、指先を引っかけように弾いて、コーナーキックにする。その守備もまたなんともモタモタモタモタと……なんとかかんと蹴り出すが、愛も胡桃も前線に突っ立ってて、到底届かない。無人の中盤で悠々と拾われる。

その無様な様を観て、大地の心の中できが切れた。
心の叫びに、身を任す。

「ユミ姉ッ！」

「はいっ!!」

ほー。

そう来たか。

と、自分で驚いた。中盤がだらしない、ならファーストチョイスは美緒ではないか。

いや違う。今必要なのは、「中盤の選手」などではない。

アップから駆け寄る、ホットな姉貴。

手を軽く握る。目を見つめる。戦術面をなにか言おうとして……止めた。そう必要なのは、これだけ。

「戦え」

「ハイッ!!」

席に戻りジャージを脱ぎポーチからアレを取り出す。髪を後ろに撫で付け直して、掛けた。

「「おつ!!」」

四人と古都が驚いた。姉さんには珍しい、ド派手なサングラス。でも……意外、似合ってる!

あつ、見れば背中の中のシャツネームもいつもの「YUMIKO」じゃない。「YUMMY」とある。あれは? ユミ?

とにかく、「いつも」じゃない。

これは……おもしろそう!

「交代は誰です!? エレですか!」

「いや。ナナ」

「ナ……はいっ」

四審に告げに行く。交代札が上がって、まさか自分が替えられると思ってもいないナナ、エレーナに指摘されて、目を丸くして、自分を指して、

「ウチ? ……ウチ!?」

大地二回うなづく。ナナ二回首を振って、ダッシュで駆け戻……は? あなたどなた?

そこにいる派手なガードグラスを掛けた選手は……なんとユミ姉さんだ。ナナ、キャプテンマークをその腕に巻く。

「……頼んまつせ、姉貴」

「ン」

パンツ!

両手を合わせた。痛いほど、叩かれる。気合充分。振り向くと、

16の背番がもう小さくなっている。跳ねるようなステップ、躍動感。元氣、やる氣、闘志。

そう確かに今チームに必要なのは、あれかもしれない……

が、嫌味の一つも、言いたい。

コーチが右手を差し出す、無視する。

「負けたいん?」

「いや、勝つよ」

とぼけてからに……とグーの一発も打ち込みたかったが、姉さんの気合いを感じれば、それもあながちいいかげんな言葉でもない。

どきり、と席に身を投げ出した。古都に貰ったタオルを、頭から被る。キャプ……美緒が、その膝を優しく揉んで、声を掛ける。

「……おつかれ」

「……しーません……」

「ナナ悪くないよ。めいっぱいだった」

ぶわっ、となにか溢れてきた。

「……ほらほら、ピッチピッチ。ユミ姉さんめちやめちやカッコイイよ!」

「……」

目元をタオルで押さえたまま、起き上がって見るピッチ。

おお、今まさにオレンジの瞳をした闘犬すなわち八尾由美子が、ボールを奪いに駆け出した。

「……行けエ姉貴……」

やけくそで絶叫した。

——その叫びに押されるように、ユミは駆けた。

試合を見続けてわかった。もちろん途中投入の多い自分の経験もある。

ここで必要なのは……ガッツ。それだけ。

コーチの言うように、「戦う」だけ。

遮二無二ボールホルダーに迫った。もちろんパスで逃げられる。そのボールを追った。またパスで遠ざかる。それでも追った。パスがきつきの選手に返される。もちろん追った。右往左往鬼ごっこ、そのたびに髪が乱れ、小さな身体が変な踊りを踊るように歪んだ。

だがこの鬼ごっこは、鬼が真剣すぎた。だんだん、追われる方が怖くなってくる。徐々に、自分の手番を短くして、他の誰かにまかせようとする。少しずつ、焦って、パスが雑になる。そして。

「「あつ!!」」

ギリギリで出そうとしたパスが、ユミ姉の一杯に差し出した足に当たった。コースが変わって、ルーズボールになる。

今度は眼の色を変え、いや最初から違うんだけど、さつきとは別人のダッシュで駆け寄るエレーナ。が、半歩早くボールを奪われる。奪った選手は——ユミ姉さん。

「「おおっ!!」」

たかがボールを弾いてそれを奪っただけのプレーで、ベンチが盛り上がった。サッカーに限らずスポーツとはそういうもので、なんでもない場所と時間の、なんでもないたった一つのプレーが、試合の流れと結果を変える。

そういう、恐ろしいものである。

運命と同じ。

だから人はスポーツに熱中するのだろう。

どのスポーツでも、「ひとつひとつのプレーを大切にしろ」と口を酸っぱくして言われる。その「事実」を身に染みて腑に落ちて識る頃には、引退間近か指導者になっているのだが。

今日のユミ姉は気迫が違う。そして——あのイタリアンのお店で、年下の男の子に焚きつけられたアドバイスもある。

「わたしが、状況を、変えてみせる」

ドリブルを敢行した。あの、パスも出せなければ足元不如意を自覚してる選手が、敵陣真正面へ斬り込んでいく。

「「おおーっ!!」」

ベンチはもう立ち上がらんばかりに凝視していた。頬が緩み口元に笑みが載る。気合と気迫が、観てる方にも乗り移る。

もちろん敵DFが慌てて寄ってくる、それをいなすようにバン!と横に大きめに蹴り出すとシュートコースを確保、その身体を斜めにするようにして、利き足でもない左足を、思い切り振り抜いた。

抑えの効いたミドルシュートが浮き上がるようにゴールを襲う。急襲に慌てたGKが真上に弾いて、コーナーキック。

チャンス到来いや、強奪。

「わ~~~~~っ……」

もう表情が暗れ渡るのはベンチだけではない。ピッチの選手も、なにかを思い出した。

なんだ、あんな簡単なことじゃないか。

ボールを奪いに走る。

前へ運ぶために走る。

そして思い切り、シュートを撃つ。

サッカーつて要するに、それだけのことじゃないか。

ユミ姉さんの示してくれた模範解答に、一瞬でチームのテンションが切り替わった。

ありますがセットし胡桃を狙ったCKはGKに取られたが、守備に走るミラクルズの足取りは軽やかで、さっきまでとはまるで別チームだ。

「……ボール動かして人動かしての前に……」

タオルを被ったまま、隣の美緒に、あるいは側の指揮官に、言うとも無くナナが呟いた。

「……自分が走らな、あかんな」

「だね」

美緒も頷く。

自分が投入されたとしてああまで鮮やかに士気を変えられたか。まだまだ、学ぶことは、多い。

ピッチの選手たちはもつと肌で感じていた。がぜん、運動量が増え、一人で孤立していた局面で二人め、三人めがサポートに現れるように

なった。そうみんなが、ユミ姉さんの真似をし始めた。

相手のよく練られた組織的守備も、あとからあとから湧いてくる攻撃の手数に、徐々に対応しきれなくなる。ポタ、ポタと水が漏れるようにボールがこぼれるようになってきて、たまらず前残っていた攻撃専任の二人も守備に戻った。

「蘭ッ！ 11に張りつけ！ 間違はなくボールくる！」

「応ッ！」

ユミ姉が指示を出す。最終ラインの蘭が持ち場を離れ、ユミ姉を追い越して11番野田選手を追いかけてまわす。それでも敵陣としてはやはりボールを運ぶにはエースが頼り。パスが出る。それを受け取った野田選手、ターンして前へ……

「だっしやあああつ！」

まさに姉貴の読み通り。そこを蘭が豪快にスライディング・タックルでボールをこぼさせた。コロコロ転がるイーブンボールに跳ねるようなステップで駆け寄るのはもちろん姉貴、背を伸ばしガードグラス越しにルックアップ、空いてる右サイドのスペースめがけ、またもドリブル。

奪いにくる敵左サイドバック、もちろんユミに華麗なステップなど無い。身体を捻り、ボールを守る。挟んでくる左サイドハーフ、両腕を突っ張って寄せ付けない。足を蹴られても、腰をぶつけられても、ユニを掴まれても、四つん這いになるようにして、まるで赤子を守る母親のように、耐えに耐えた。

フォロウに控えていた明日葉のハートに火が点いた。バックパスす

ればいいのにああも守るということとは……

ピッチ蹴立ててユミ姉さんの真横を駆け上がる。

その瞬間、パスが出た。

ちょうど3 m。

ユミ姉に二枚手当して右サイド奥手薄、明日葉、そこへ鮮やかに切れこんでズバン、とクロスを上げる。

胡桃、飛ぶ。

ようやく本日一本目、待ち望んでいたまともなクロス。

しかし、いつも間違はなく視界に入る相方は居ない。愛はファーサイドに走ってて少し遠い、体勢ムリめだが自分で撃つか……いや。

視野には入っていないが、感じた。

オーラとかいうの？

そうだバスケの時も、そうだっけ。見えてなくても、パスを出せば取って、撃ってくれた。それがチームってヤツだ。

(……よろしく)

頭で、パスを出す。

もちろん飛び込む、小柄なファイター、オレンジの瞳。

「ヤッ!!」

自然と短い呼気が出た。コースを狙う技術など無い。タイミングを外す余裕など無い。でも私には、なんでも真正面からぶち破ってやるという、闘志なら、ある。

シューーーーーッ……

グラウンダーが地表すれすれを飛んでいき、GK手前で地面を掠めるようにワンバウンドして、伸ばしたその手を、掻い潜った。

1点。

「「イヤあッハーハーッ……ッ!!」」

むしろベンチで大声が上がった。鬱憤が、晴れ渡る。

ユミ、相手GKからボールを奪おうとして、一瞬早く奪われた。胡桃。背を一つ叩かれて、

「……ナイッシュー、ユミー。……ヤミィ？」

Yummyは小さく左肩をすくめた。「どちらでも」とその肩が言う。

「……よし！」

よし、よし、よし、よし、よし。

ベンチでは、大地反省。

つまらないことは考えるものではない。毎試合毎試合、ワンプレーワンプレー、勝利のために。それ以外なにが必要か。

何かを得るのは、そこからしかない。

ベンチを見た。五人とも、いや古都も入れ六人とも、輝く瞳でこっちを見てる。

「美緒、可憐、行くぞ！」

「「ハイッ!!」」

「「エーッ!!」」

「忍、千里には取り返させてやりたい」

「ま、そりやそうでしょうけど、ブー」

「交代はエレと愛」

「はいっ」

「ちょ、あたしは!?」

大地、流乃には応えずもうピッチ向き。

「あたしは今日はバイク事故やから。ほら見学しとき」

「えー……ちょー不完全燃焼ー……てかなんーにもしてないじゃん……」

「『なんにもしてない』とかゆーたあかんで。応援に準備、立派な戦いです」

「そ・れ・は・そ・お・だ・け・どー」

——美緒と可憐が入る。

美緒、キャプテンマークを譲ろうとするユミ姉を制して、そのままにする。ポジションも、自身がDF前アンカーに入って、お姉様に自由な動きを保証する。

『……さっすが美緒……なんて可愛げのない』

普通この状況なら「私の方がもつといいMFでしょ!」とばかりにアピールに走りたくなるものだ。こんな時でも「チームにとって何がベストか」を考えそれを実行する。

そしてそれがやはりとても効いて……

「……あーでもぜんーぜん違うな……」

「ホントですね……」

「エレよー見ときや、あれをやらなあかんで、あれを」

「ハイ!」

さっきまでボールを奪っては突進してた姉さんが、全て美緒預けに切り替えた。いなやボールが四方八方、自由自在にピッチ中を飛び回るようになる。右往左往する敵選手達、むしろ忠実にボールに向かう真面目な守備が仇となる。ボコッ、ボコッとスペースが空いてはそこを……

「イヤーッ!」

可憐に使われ、ミドルが飛んだ。この時間からスピードもテクも異次元の選手が入ってきては、捕まえきれない。

なんとか押さえ込んだGK、思い切り蹴り出してFWを直接狙う。中盤を経由したら、あの16番と10番にやられてしまう。

どーんと蹴られたそれを受け取った野田選手、傲然とドリブルを開始した。

なんとかもう1点取りたい。突き放したい。

が、それを狙う、目が一つ。

すすすす……

音も立てず背後から迫り、あ、と思ったときにはもう遅い。

パンッ!

回りこんで外側真横から、弾きだす。

ファウルも何も取られようもない、だって弾き出されたことも気づかず空ドリブルをしちゃうほど、キレのいいボール奪取。

もちろん16番、ユミ姉さんだ。

千里勇気を持って飛び出してそれを足で取る、一步、転がしてロングキックで狙うはもちろん……盟友、可憐。

可憐、DFの間を飛び出してゴールに向かう。ボールをトラップする、CBが寄ってくる、フォロウに走ったありすに預ける、狭いところワン・ツーで抜け出す、GKをかわす、もらった！

……が、もう一人のCBに押し潰される。

「PKだ！」

と叫ぶ暇も実は無い。

コロリと転がるこぼれ球に殺到する人影ひとつ。

あ、と両軍選手が思う暇もこれまた無い。

右足一閃、まっすぐなシュートが、ゴールネットに突き刺さる。

なぜかそこに居たのは……さつき味方GK前でボール奪取してたはずの、

「ユーーーーーミねーーーーえさーーーーーん!!」

ベンチから絶叫が飛んだ。

ピッチのみんなも駆け寄った。

だがしかしユミ姉極めてクールに、左手でキュツ、とガードグラスを直しただけ。

(まだ勝ってない。気を緩めるな)

とでも、言いたげに。

「……カツ、カツコ良すぎる……」

「ま、まるで何人もユミ姉さんがいるみたいですよ!」

「あれをやらなあかんで、あれを」

「ハイ……ムリかもしれません」

「せやなあ……」

と、みんながユミ姉の勇姿に悶えてると、大地振り向いて、

「流乃」

「はい？」

「いくぞ」

「は？ でももう三人……」

「今日は交代五人までの約束」

「なっ……それを早く言ってよ!!」

大慌てでジャージを脱ぎ捨て腕まくる。

「誰と!? どこ!?」

「明日葉。右バック」

「右!?」

「マキを無理矢理活躍させろ。ストレス溜めたままじゃ、あとがかなわん」

「フッ……あいよ!」

流乃は本来、左のサイドアタッカーである。先程の明日葉のように自ら斬り込んでクロスを上げるのが役割だが……

右サイドバックに入る。美緒とアイコンタクト。さっそく、ボールが供給された。何をするつもりかはわからないが、いつもと違うわけだから、なにかやりたいのだろう。

流乃、その超速飛ばして駆け上がる。ドリブル自体は右も左も関係ない。マキを追い抜き、コーナー・ギリまで斬り込んで、

ズドン……

と右足で棒球。FW陣が呆然見送るホームランが、左タッチを切つ

た。

「ルー！」

ノ、と大雑把なクロスを叱ろうとしてマキ振り向くと、ウインクが飛んできた。

？

……エー……ドユコト？

ニホンジンはこのイシンデンシンとやらがまだ今ひとつ苦手なマキだが、とにかくアタシになにかしてくれるのだろう。

ならそれを心に刻んで、時を待つ。

が、待つまでもない。

右に入ったイキのいいスピードスターを避け、左でボールを回そうとする敵陣。だがその手の消極性こそ勝負には禁物で、逃げ腰は身体と思考の柔軟性を奪い、行動を鈍くする。

それを見逃さない、闘犬・ユミ姉ではない。

がると一声吼えてボールに喰らいつき、喰いちぎった。

「姉さん！」

請われるままに美緒へ返す。

美緒ワンタッチでマキめがけサイドチェンジ、マキ、それを受け一瞬ドリブろうとして……ナニカシテクレソウナ、右手に駆け上がる赤毛の眼前へポイと出す。

またも狂気の速度でピッチを斬り裂くパリのクレイジータクシー・ルノー、泣き顔の相手サイドバックとサイドハーフがヒ首抱えた鉄砲玉のように抱きつきにかかる。それを十二分に引きつけて……リターン。

マキ、受けて、どフリー、狙いすまして……

「ヤアッ!!」

ゴール真正面まん真ん中へ、速く低く鋭い最高のクロス。

だがしかし、胡桃はさっきの流乃の棒球対応でニアに走り、可憐はいつもの癖でファーに張って少し遠い。いつもならトップ下ありますが正面待ち受けるが、今日は左サイドに……でも大丈夫。

「いつけええええええ！」 「キターーーーッ!!」

ぽっかり空いたそのスペースへ、弾丸のように飛び込むピンクの影ひとつ、背の番号は、もちろん16。

ぽーん、飛んだ。

飛んから、足を突き出した。

それはまさに、カンフー・キック。

彼女はピッチではどこまでもスマートではない。

でもだからこそ……無理矢理だからこそ、力づくだからこそ、目一杯を超えてるからこそ、なんとかしようとするその強い意思が、一緒に戦う者に、観てる者に、そして運命の女神様に、伝わる。

伸ばしたつま先で引つ掛けるように方向を九〇度変えられたボールは、GK完全予想外のゴール右上隅に、吸い込まれた。

「アチャ~~~~~~~~ッ!!」

ベンチでナナと明日葉が中華風に叫んで、手刀を繰り出した。ユミ姉のプレーには、身体を突き動かされる何かが、ある。

「ヒィ・ヤッホオーッイ！ ユーミィイ！」

「ん」

グラスを直しながら振り返った先に、両腕広げてマキが居た。リオの太陽のように輝く笑顔で、叫ぶ。

「ヘタクソッ!!」

ユミそれに応えて、左親指サムアップ。唇の端に、自然に笑みが浮かんだ。

「そうよ私はヘタクソ。」

「だからなに？」

——カンファー・ゴールの興奮も覚めやらぬうちに、試合は終わった。

2―3でミラクルズ、大逆転勝利。

整列、礼、握手、帰還。

ナナとエレーナが走り寄った。

「姉ちゃん！ 助かったでホンマ！ 今日の姉ちゃんは、カッコ良すぎやあ!!」

「ハットトリック、おめでとございマス!!」

「……ハットトリック?」

そこでようやく闘犬が、ガードグラスを少し、下げた。その瞳はもう、いつも真面目なお姉ちゃん。

「……誰？ 胡桃?」

「「……」」

目が点になる。人間は……そこまで夢中に、なれるのか。

「……いや、姉ちゃんが」

「え?」

「ユウウミ・イイイイイ!!」

「ぐも」

きよとん、とした姉貴を、ももが抱き潰す。顔をぐしゃぐしゃにして頬ずり・頬ずり。

「ユーミのおかげで助かったよお！ ユーミは救世主だよお！」

「ちよつ、がつ、いだ、ギャッ！ 舐めないで、舐めないで!!」

「ムチュー！ ムチュムチュ~~~~ッ!」

「にゃ~~~~ッ!!」

慣れないシステムで一番神経をすり減らしたのは、DF統率のももだったかもしれない。忍と胡桃も、もちろんマキも、にこやかにその背を叩く。チームメイトが、姉さんを中心に二重三重の輪を作る。

……それを眺めつつ、美緒、横の旦那にひとりごつ。

「……いやあ……今日は参りました。上町コーチの、いじわるに」

「さあ……なんのことやら。僕はいつでも、勝利目指してまっしぐらのつもりなんだけどねえ」

ぽりぽり、と頬を搔く。

この人は……普段は素直ないい子なのに、サッカーになると途端に底が抜ける。いろんな底が。

「……でもあのゴーグルかつこいいね。誰の発案かな？」

「ガードグラスそのものよりも、それを掛けることでスイッチが切り替わったことが大切なんだ。万事優等生の姉さんに必要だったのは、それだ」

「だ・れ・の・発・案・かな？」

「ちよつとご挨拶行ってくる」

きーっ！

……でも、美緒が問いたただすまでもなく。

「……ユーミ、コレちよつと貸して！ アタシもコレ掛けたら、ユーミみたいなミラクル・プレーができるかも！」

「あつ、これはダメ」

「ガードグラスに伸びたマキのマの手を押さえる。」

「いーじゃんケチー！ 減るモンじゃなしー！」

「違うの、これは大事な大事ないただきものだから！」

「誰に？」

「あつ、これもアマゾンの族長に貰ったもんスカ!?」

「姉さんの背に乗っかりつつ千里がバカを言う。」

「そんなわけないじゃない」

「じゃ誰に？」

「……うっ……上町……コーチ」

「「わははははははは!!」」

爆笑が起きた。

えっ……

ことここにおよんでも、だめなの？

「あはははは、だってそんな、大ちゃんが女の子に贈り物するなんて！」

もも。

「石灯籠が郵便物届けてくれるよりありえない」

胡桃。

「そうとも。何と言ってもサッカー以外では朴念仁もいいところだからな、私が言うのもアレだが」

忍。

「ということデ、ねー貸してよその誰かさんからの贈り物ー！ なんだ、それ男の子カー！ サッカー好きの、男の子なのカー!?」マキ。

サッカー好きの、男の子なのカー？

「「……マジでッ!?」」

ユミ、そそくさとポーチにグラスをしまいこみ中。

顔が、真っ赤も、いいところ。

私を隠してくれるレンズが無ければ、私は、私。

ぎゃー……っ……

珍しく可愛いユミ姉さんを中心に、また絶叫の輪が拡がった。

——ナナ、適当に狂乱の輪から外れて、ピッチに座り込む古馴染みに声を掛ける。

「のんちゃんおつかれ」

「あ……ナナ。へへ、やつぱ噂通りつおいわ」

コン、と拳を合わせる。

「いやいや、そっちのフィジカルもかなりのもんやったで」

「とちゅーまではイケるかなー、と思ったんだけどねー。あの16番出てきてからどーにもなんなくなつた。ありやいい選手だわ。あれが噂の長居さん？」

「ちやうちやう。あれは我らが誇り、ユミ姉さん。長居さんはその後出た10番」

「あつ、あれかあ！ あのイヤラッシイ・ヤツツ！」

「わはは。ヤラシイやろ」

「もうね後ろ振り向いてパスもらおうとすると必ずあの10の背中が邪魔してるの。どんなに外そうとしても。気が変になりそうだった」
「外で見ても味方でよかつた、思うよ。アレとか可憐とかおるで、オモロイで、また代表きてや」

「頑張るよ。予選で、またやれたらいいね！」

「おう。一緒にブロック代表取ろや！」

「ん！」

コッソ、とまた合わせる。

「……でもあのメガネ、カッコイイなあ……やつぱ私もああいうキラ作りしなくちゃユース呼んでもらえないのかなあ……」

「わはは」

ここにも、変な病気が伝染ってそうだった。

「……最近バイクに興味が出て」

流乃がすつとぼけた顔で言う。ナナが応える。

「あんた乗ってるやん」

「あ、バイク、手動、じゃない足漕ぎの、えー自転車」

「ああ、チャリかいな。流行ってんねー」

「ま、いいのになるとカーボンどうのこうので一〇万二〇万五〇万なんだけど、二万三千もあれば最低限のは……」

「あかんあかん流乃やめとけ、最初やからこそええの買わなあかんて」

モノにはうるさい、三十六が止める。

「もちろん、いいのでもいいよ？ 別に二万三千で制限されてるわけじゃないんだから。蘭もどう？ 自転車」

「あ、自転車はボクも欲しいかも！ フルサスのマウンテンバイク！ はなちゃんは？」

「あたしはなににしよう……ジャージかな。スパイクと合わせればそんなもんでしょ？ 姫は？」

「姫も……うん、スタジャンとか。これから寒くなるから」

「あそれもええね。ほなウチは冬向けにダウンジャケット」

「俺は新しいデジカメかなあ……いや安もんイヤやなあ、ほなそれを」

頭金にしてローンを……」

「もう全然サッカードから離れてるよ」

大地珍しく苦笑いでツツコミを入れる。

お昼休みの教室、いつもの2年の面々。ユミ姉さんのガードグラスが二万三千円の経費落とし、てのがバレ、やれ私ならアレが欲しいやれ僕ならコレが欲しい。

「なに言ってるんの、あたし自慢のこの脚を鍛えるには（パンツ！）たぶん自転車が一番」

「ボクも！ ダウンヒルとかでね、根性つけるんだ！」

「ジャージこそ経費で落としてよ。サングラス落ちるんだから」

「ロードワークに、使います」

「せやせや。風邪引いたら戦力ダウンやろ。だからダウンジャケットを」

「ぼくはそのデジカメでみんなの勇姿を記録します！」

「だーかーらー」

困ったな、という顔で、もちろんみんな大地茶化して遊んでんだけど、横の嫁はんに助けを求める。

「美緒、なんとか言つてよ」

「……うん。これで行こう。」

大地君、私も考えたよ」

「美緒まで！」

「なんすかキャプテン。『二人で豪華中華料理』とかそなんあきませんぜ」

「私はそんな自分本位じゃないよ。
一泊温泉旅行」

「いや~~~~~っ……」

みんなで腕組みして首をひねる。

一人で行くなら、勝手に行ってくれていいが。

「えっ？ だってデイズニーランド、つてガラじゃないでしょ？」

「問題はそこじゃない」

「温泉か……いいな。どこ行くの？」

「ちよっ、ちよっ大ちゃん！」

「ヤッ！それはもちろんこれからご相談の上で！」

「お土産は、炭酸煎餅がいいなあ」

「……ひゅ……」

「ふはははは……」

大地の天然に、嘔きだす。

ざまあみろ。健全な青少年にあるまじきことを考えるからだ。

「……もう最近負け続け」

「なに言うてんの。のんちゃん誉めてたでアンタのことを。『マー

ク嫌らしすぎて気い狂いそうやった』って」

「『あはははは……』」

「もー……」

ひとしきり笑って、三十六が提案。

「ほな、それは別にして今日はみんなで『スポルティーバ』行ってみよか。たまには」

「おー！」 「さんせーい」 「いいね」 「うん」

「異論なしです。私はもう温泉に決めてるので」

「押すなあ」

「えっ、温泉って……スポーツなの？」

始まった……大地のパワー・ボケ。彼はいったんボケモード入ると、ボケにボケを重ねてとんでもないところへ行ってしまう。

三十六、親友、丁寧に拾ってあげる。

「ああ、ああ、汗かくやろ、心拍数上がるやろ、体温上がるやろ、立派なスポーツやで！」

「でも……スポーツ用品店でなに売ってるの？」

「浴衣と手拭いと卓球のラケットに決まってるやんけアホやな」

「ああ……そうか！」

「あとフルーツ牛乳とな！」

ここまではみんな我慢できた。が、次で決壊。

「えっ……コーヒー牛乳じゃなくて？」

だははははははは……

お昼ごはんが、逆流しそう。

——放課後正門前出たところで、3年一団とバツタリ。おーどうしましたか、いえ『スポルティーバ』に、なんと実は私たちも、なんて

言つてるとまさに奇遇、1年の六人衆もやってきた。

「わー、偶然ですねー」

「てかやっぱ姉さんのあの活躍見りや欲しくなりますって、あんなふうに変身できる魔法のアイテムが！」

「私も前から欲しかったんだーサンングラスー」

「忍様似合いそうデス！」

「あ、エレちゃんもきつといいよ。ブロンドは得だね」

わいのわいのわいの。

当のユミ姉さんは、こそばゆくて照れている。

「姉さんのおかげで、流行りそうですね、サンングラス」

「あ……上町君ごめんなさいね、なんだか私のせい……」

「なにを謝ることがありますか。みんなも凄く刺激されたし、姉さんも大活躍だし、言うこと無しです、うん」

「でも……みんな何か買ってもらおう気、満々だよ？」

「えっ……やっぱり個人的プレゼントにしておいた方が、よかったですかね？」

「……」

いやあ、それはマズイ。

そっちの方がマズイってことに気づかないのがこの人のいいところ
なんだけど……

「弱ったな……あ、まあ、お金の心配は三十六にしておらおう……あれ？ ユミ姉さん？」

「ん？」

「髪飾り、変えました？」

「ああ」

上町君には珍しい。そんなところに、気づいてくれるなんて。今日は、赤白緑の小さな玉の組み合わせ。

「うん。ちよつといろいろ、変えてみようと思って」

お守りに、守ってもらえばかりじゃ、新しい一步は踏み出せない。私が守る、とまで言う自信はまだ、無いけれど。

「似合ってますよ。トリコロレ（イタリア国旗）っぽくて」

「ありがと」

「そうだ！」

上げた声に、注目が集まる。

「『スポルティーバ』のあと、また『風花』でちよつとなにか食べません？」

「『おおー！』『豪勢な』『贅沢だな』『なになに、コーチの奢り！』『いやっはー！』」

「いやいや、奢りじゃないけど、奢りじゃないけど」

「あ、祝勝会してないから経費で出そう！」

「『やったあさすがプロデューサー！』」

「いやあ、俺日曜行っていないからめっちゃ寂しかったんやって……」

「『あはははは』」

笑顔満面で歩を早めるみんな、つい、と美緒が大地の袖を引く。

「……『また』って、なに？」

「あ、それはね」

「上町君」

姉さんが、振り返る。

人差し指を唇に当てて、

その指を、大地の唇に。

念も押す。

「……ひみちゅ」

大地一瞬ポカンとして、

「……はい」

と、素直に笑顔。大きな弟のようでもある……そうでもないようでもある、あり。

ふふふ、と笑って早足のユミ、先頭に立つ。それを追って3年生が急ぎ足、と、1年生もはしやぎ出して、そうになると2年も大股にならざるを、えない。

失敗した焼き魚を見るような顔の美緒を、ナナがにへらと笑ってつく。

「ポジション、取られまっせ」

「ぜっ・たい・に・渡しませんっ!!」

ボランチも、キャプテンマークも、それから……
なにもかも!!

笑いながら軽やかに歩むユミ、その瞳を覆うのは、新しいメガネ。
可愛い年下の男の子が、一緒に買ってくれた。

最近宝物が、三つ増えた。

このメガネ、あのグラス、そしてこの……気持ち。

ひとは変わる。

いつからでも、ほんのちよつとしたことで。

変わりたいという、気持ちさえあれば。

匠の業でボールを奪い、

炎の闘志で駆け回る、

競って粘ってへばりつく、

地獄の底までついていく。

地味だグサイと笑わば笑え、

仲間がみんな待っている、

プレスをダッシュをチャレンジを。

必殺の、武器ふたつだけ、

3 mパスと……このキモチ。

わたしが・なんとか・してあげる。

泥が勲章、汗がお化粧、

労働者が栄えぬ世界に明日はない。

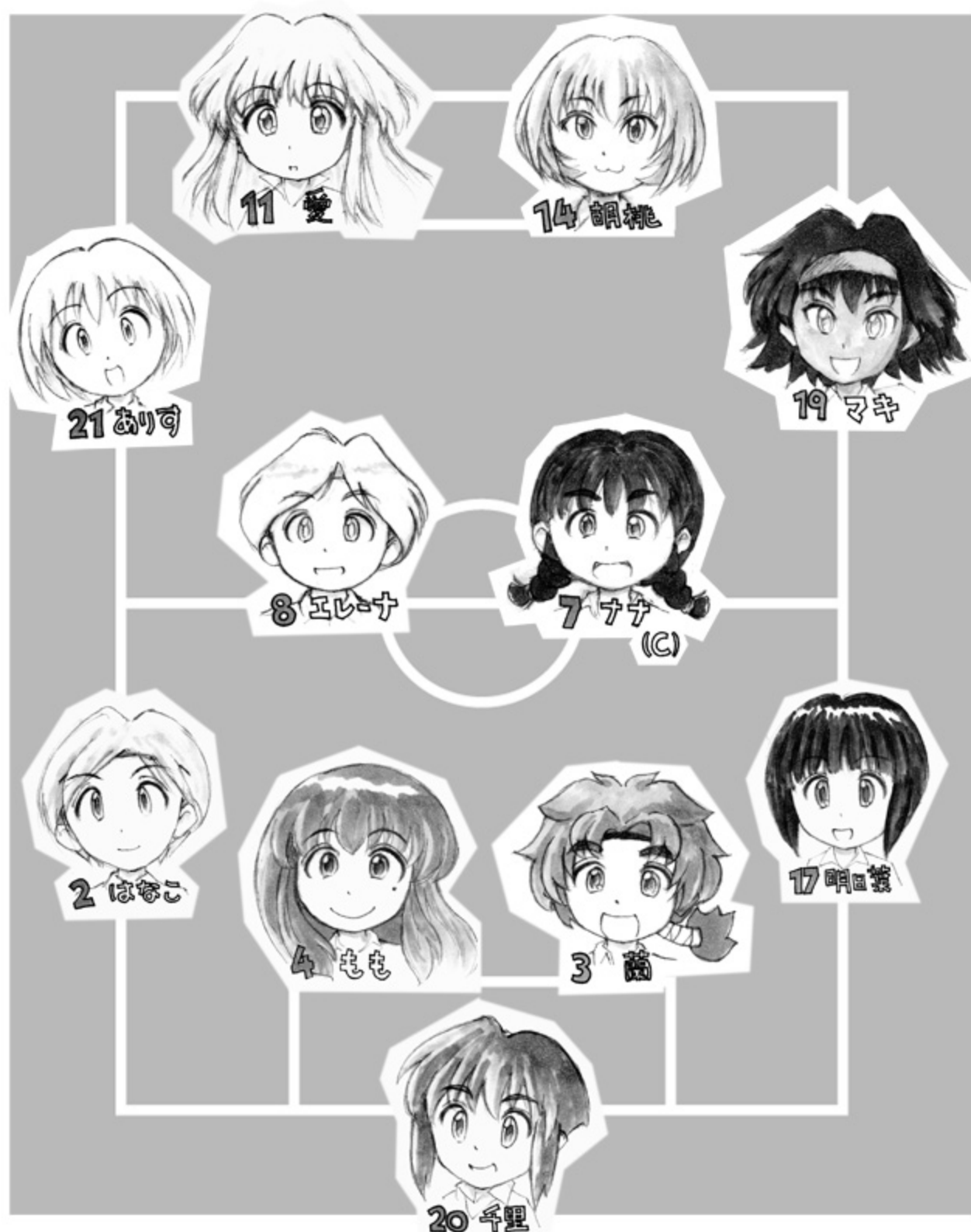
見参、頼れる姉貴、ユミ姉さん！

Never GiveUp, Go Ahead, and DO MIRACLES!

「Fighter? Sister!」



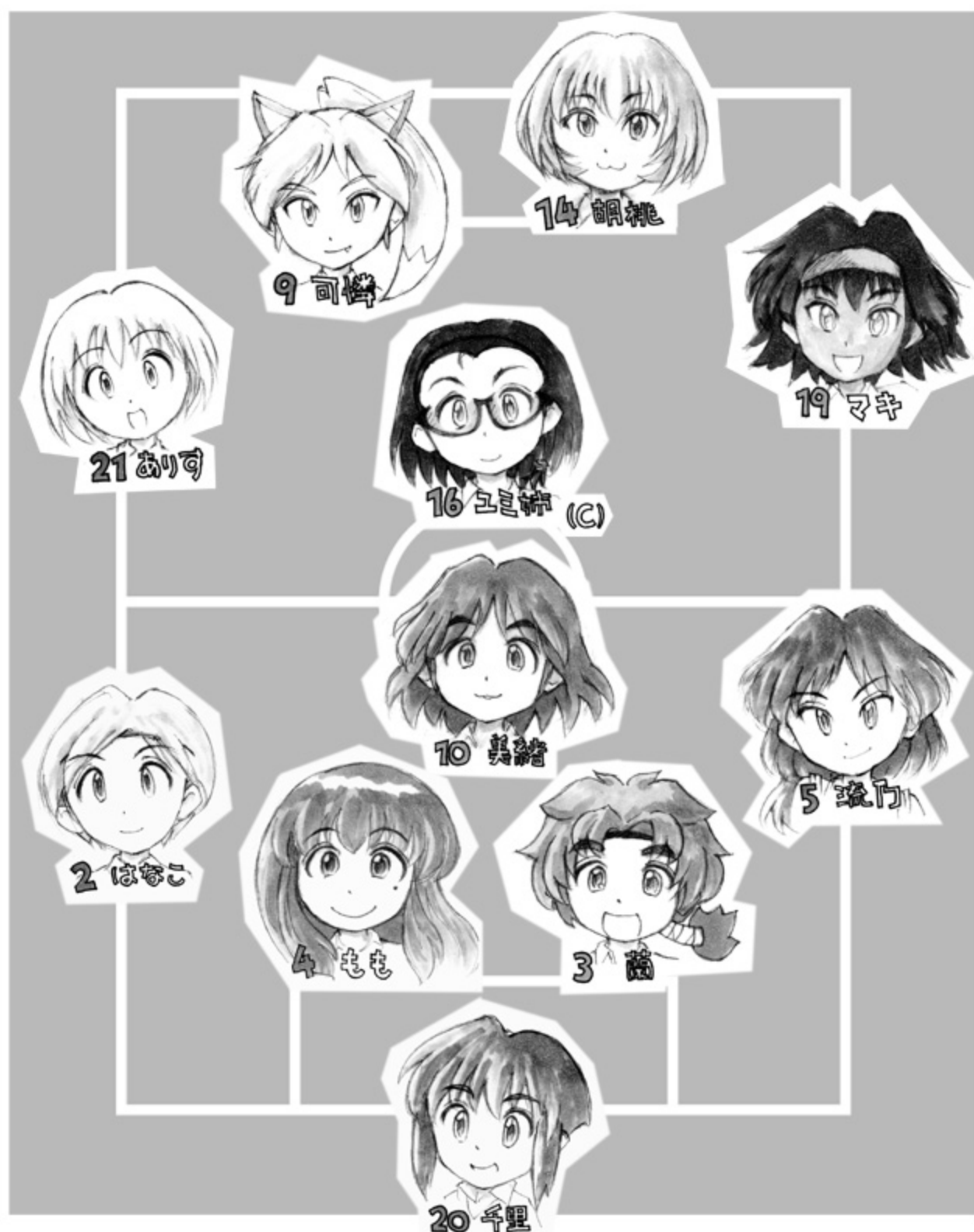
[Game Start] 4-4-2 Orthodox



Reserve



[80min] 4-1-3-2 Fighter Sister



Reserve



■あとがき

ありがとうございます、ながたかずひさです。

お楽しみいただきましたでしょうか。

まずは女子日本代表、W杯優勝おめでとうございます！

このお話を描き始めた 99 年頃には、アメリカは全く歯がたたない強敵でした。

（そんな感じのことをナナや可憐がたまに言います）

それをあの大一番で……いやはや、時は経つもの、状況は変わるもの。

どんな時でもまさに、ネバーギブアップゴーアヘッドアンドドウ・ミラクルズ！ですよ！

さてさて、初めて本格的なリメイクに挑戦してみました。

筋は同じですが、全書き換えです。

どうでしょう、姉さん可愛カッコよく描けてました？

大ちゃんは相変わらずヒドイ男ですねあれ（笑）

この巻が同人時代最後の作品で、当時随分難儀した記憶があります。

ある程度思う通り書けるようになってくると、

いいこと描こう、ドラマチックに描こう、って変な欲が出ちゃうんですね。

それを無理にまとめるから窮屈で……今回読み返してクラクラしました。

いやあ面目ない。精進します。

またみんなの活躍を、手直ししたり、新しく描いたり、していきます。

楽しみにそして気長にお待ちいただければ。

お読み頂きまして、まことにありがとうございました。

貴方様に健康と笑顔のあらんことを。

■おくづけ

書名 Miracles! Episode 16(restart) -Fighter? Sister!-

作者 ながたかずひさ

発行 サークル PowerNetwork!!

発行日 2011 年 8 月 14 日

Web <http://rakken.net/>

twitterID KazuhisaNagata

Mail nagata@mti.biglobe.ne.jp



Miracles! Episode16 (#5) restart - Fighter? Sister! -
Presented by Kazuhisa Nagata
<http://rakken.net/>